

# 第五回芝不器男俳句

新人賞

一次選考通過作品









- 1 渡り鳥水尾の祖国によろしくと
- 2 曼珠沙華開き放てる帆影かな
- 3 船着場見たことのなひ蟻がゐる
- 4 蚩酒徴兵を経し底無しと
- 5 玉葱に挽肉を詰め焼ひたもの
- 6 野良犬を野犬に変ふる旱星
- 7 短夜の街路に満つる眠り人
- 8 木下閤動かぬならば死んでをり
- 9 熱帯や計画都市の四車線
- 10 源五郎までは喰つたが田亀とは
- 11 顔覆ひ赤き水着を選ぶ人
- 12 炎昼の鼠濁流渡りきる
- 13 薙を斬る刃一閃椰子実売り
- 14 山清水異教の神の祠から
- 15 夕風の大湖白猫眠る舟
- 16 年の瀬に異国人のみ働けり
- 17 暮の市滅びし国の玩具買ひ
- 18 行く年やあなたの上に平和あれ
- 19 隠れ里春着映えたる異相の子
- 20 沙漠夕焼地平線へと影の伸び
- 21 水論や地主の雇ふ銃手の眼
- 22 夏草のたびにとどまる驢馬車かな
- 23 蜃気楼いくつ数へて実の村
- 24 あちらより来し旅人に日の永く
- 25 奔流をのぼりて七日春深し

- 26 「渋滞の始めに牛尾蛇を打ち」
- 27 「首都の宿踏絵とされし敵の顔」
- 28 「念腹忌逞しきもの溶けゆけり」
- 29 「駅前の川に少年鮫を釣り」
- 30 「電線を渡る一列冬の猿」
- 31 「暖炉火や機銃痕ある喫茶店」
- 32 「隔離地区焚火の人ら棒を手に」
- 33 「煙草買ふ鉄格子から虎落笛」
- 34 「牛鍋に似た何か喰ふ屋台かな」
- 35 「着陸や高原の雪斬りつけて」
- 36 「天空の氷樹抜けゆく道ひとつ」
- 37 「綿雪と巡礼遠ざかる車窓」
- 38 「雪嶺の低き沸点鍋煮えず」
- 39 「日本鍋取りわけられて具の混ざり」
- 40 「頂上やここも地球か冬星座」
- 41 「源流の雪片育て文明に」
- 42 「草の花ここに町あり空爆で」
- 43 「水澄めるかぼそき川ぞ停戦地」
- 44 「鉄柵に結ぶ手紙を秋の風」
- 45 「末枯れて見えし寢墓を刻む死語」
- 46 「永遠に見下ろしてゐる鹿の首」
- 47 「大陸のいつこにもあり草相撲」
- 48 「望月や並ぶ仏に顔のなし」
- 49 「ちちろ鳴く動き少なき渡し守」
- 50 「ASAP 白き北の風」

- 51 一句削除代わりに狂い花を置く――
- 52 囓られている青鮫のある歩道――
- 53 焚火越し座れるものの眼を見るな――
- 54 鉤爪や目貼の札も抉りけり――
- 55 人毛のセーターならば傷浅し――
- 56 北窓を塞ぎ暗闇なのにいる――
- 57 凍星に吼ゆればすでに人ならず――
- 58 竹馬の隊商越ゆる瘴の沼――
- 59 それは棒鱈ぶらさがっているそれは――
- 60 買わないか歴史を変える種袋――
- 61 死児の名を苗札に書く動き出す――
- 62 杏花散らし山駆け上がる神や風――
- 63 花藻海孕める女魚群るる夜――
- 64 登るたび死ぬ夢を見て戻る山――
- 65 老母喰い破り龍出づ青嵐――
- 66 午前二時紙魚の集える革表紙――
- 67 宿命がお代ですなと水売人――
- 68 小便も汗も獣の臭いかな――
- 69 廃城やつるべ落としに死者醒めぬ――
- 70 月光の梯子架かれる書架の街――
- 71 胡桃割り人形の割る薬指――
- 72 天の川ほとんどいたるところ闇――
- 73 川舟と詩人と琴と踊子と――
- 74 ゼラニウム香る運河に魔女を焼く――
- 75 頂上に洪水を待つ竜の骨――

- 76 螺旋都市鳴く海亀の背に聳え――
- 77 聖杯を宿す階(きざはし) 蔦紅葉――
- 78 登高や贅の乙女の腿白く――
- 79 鯨群来漁師の背から人面鳥(ハルピユイア)――
- 80 赤黒き槍傷隠す渡り漁夫――
- 81 眠る島起こし喰わるる夜網船――
- 82 交われる獣も人も亀の餌――
- 83 懸下都市二百十日の崖に揺れ――
- 84 不死鳥の今日もかからぬ囚籠――
- 85 添う滝のしぶきそぼふる路涼し――
- 86 吹き込みし風奏でたる秋の声――
- 87 動かざる山繭動く街に垂れ――
- 88 病葉の巷崩れて落ちにけり――
- 89 砂時計街逆立ちて秋行けり――
- 90 氷結都市凍解けし人勤めへと――
- 91 約束の御子ぞ眠れる氷柱かな――
- 92 夜の白乱さぬ砧一つ打ち――
- 93 蝦夷魼(アーミン)に従い行かん雪の果て――
- 94 鷲打ちし石榴実れるカテドラル――
- 95 樺火消え北の文明滅びけり――
- 96 終末都市全人種流る雪解川――
- 97 天高し最期の狼煙消えにけり――
- 98 まず猫が絶滅次は蛙かな――
- 99 人類てふ無縁仏や墓洗ふ――
- 100 花芙蓉今日この世界滅亡す――

- 1 冷房の中で国家を考える――
- 2 お互いに黙って麦茶飲んだだけ――
- 3 達谷忌父を殺めること出来ず――
- 4 扇風機出してこれから勝負する――
- 5 メロンには生ハムというほどもなく――
- 6 玉葱が溢れて座る場所がない――
- 7 思い出というには甘い蛇莓――
- 8 桜桃のような姉妹で召し上がれ――
- 9 シリアではパイナップルのようになる――
- 10 黒鯛はみんなのものじゃありません――
- 11 梅雨明けるやはり約束破ったか――
- 12 会えないと言われトマトのようになる――
- 13 炎天に終わりにしたい恋もある――
- 14 平和とは蚊取線香焚いて寝る――
- 15 日盛に剃刀の刃が光ってる――
- 16 鰻食べ我慢するしかないのです――
- 17 反戦の思想を運ぶ蟻がいる――
- 18 蟬は鳴く人間であるとは何か――
- 19 シャワーから出てくる人は決まってる――
- 20 起き上がることも出来ない蟬は鳴く――
- 21 寝冷した悪夢の中にいたようだ――
- 22 夏風邪の身では何にも出来ません――
- 23 向日葵のように首垂れ母待つ子――
- 24 重すぎる体をずらす広島忌――
- 25 立秋は人が恋しくなるものか――

- 26 台風が過ぎて死にたくなってくる――
- 27 ベッドから動けないまま長崎忌――
- 28 秋初め死んでしまえばもう終わり――
- 29 盂蘭盆会みんないるのかいないのか――
- 30 一粒の葡萄を口にまず含む――
- 31 残暑とは痛む体を蒸すものか――
- 32 平和とは葡萄一房より脆い――
- 33 寝たきりの体動かす敗戦忌――
- 34 蜻蛉飛ぶように飛べないままにいる――
- 35 秋めけばまた会いに行く人がいる――
- 36 約束を破られ西瓜食った――
- 37 秋の夜に爪研いでいる獣か――
- 38 腕時計着けて深爪秋日影――
- 39 夜食には後悔が付きまとうのだ――
- 40 涙出るほど嘔吐する震災忌――
- 41 秋高く自らを撮る独り者――
- 42 秋雨の音はあなたも起こすのか――
- 43 秋風がデートの予定ごと飛ばす――
- 44 稲妻が落ちて世界が暗くなる――
- 45 秋日和明日にしてもいいですか――
- 46 重陽にめでたくもない決意する――
- 47 猪が荒らした庭に母ひとり――
- 48 秋の空君を待つ間の独り言――
- 49 台風が来るから風呂に入ろうか――
- 50 台風で飛ばされるかもしれません――

- 51 台風も過ぎてしまえば夢のあと――
- 52 月光の下でお前は何をした――
- 53 いつからか君がいなくて秋彼岸――
- 54 雨の月会えるか会えず忘れるか――
- 55 虫の声友が訪ねてきたあとの――
- 56 秋天にやりそこなったことがあり――
- 57 天の川奴が死ぬまで生きてやる――
- 58 無月には死んだふりでもしとこうか――
- 59 秋時雨謝って済むことである――
- 60 名月に吠えているから付いてこい――
- 61 秋の暮生きていくには重すぎる――
- 62 隔たれた世で起きている秋祭――
- 63 約束を延期してきた秋の朝――
- 64 秋澄むも吐きたくなって吐いている――
- 65 秋霖の中で私は無視される――
- 66 そぞろ寒僕の周りに人おらず――
- 67 眠れないから眠らない秋の朝――
- 68 秋湿君を思うと唾が出る――
- 69 青蜜柑のたうつような一瞬よ――
- 70 台風が明日来るからもう寝ます――
- 71 台風が来たから僕は帰ります――
- 72 台風が過ぎて私はまた来ます――
- 73 秋の夜の臭い匂いが取れなくて――
- 74 秋の昼あなたが来たら晴れ渡る――
- 75 秋日和君が出るまで黙ってる――

- 76 台風と戦争が近づいてくる――
- 77 台風が通る間は黙ってる――
- 78 秋天に生きてもいいか問うている――
- 79 晩秋に気配はするが出てこない――
- 80 勲章を貰い喜ぶ文化の日――
- 81 行く秋に道を問われているらしい――
- 82 吊し柿死刑制度をどう思う――
- 83 立冬に子供は走るものなのか――
- 84 冬浅く隠れたいのに場所がない――
- 85 僕たちは蒲団に籠り出てこない――
- 86 隙間風みんな黙って下を向く――
- 87 父は鮫喰われる前に刺したのだ――
- 88 冬眠のように静かにしてなさい――
- 89 冬だから売られたことに気付かない――
- 90 寒風が壁のどこかを抜けて来る――
- 91 冬めいて迷いだしたら壊すのだ――
- 92 その歌に鳥肌の立つ冬の朝――
- 93 隙間風頼まれもせず吹いている――
- 94 炬燵から出ていく理由などはない――
- 95 蒲団から出たくなるほど何もない――
- 96 ちゃんちゃんこ着て妖怪に成り下がる――
- 97 襦袢だけあれば満足そうである――
- 98 咳が出る今年も一人きりなんだ――
- 99 冬眠をするから声をかけないで――
- 100 今生は冬の水ほど澄んでない――

- 1 初日さす大樹に梯子かけてあり
- 2 初風の交差点ゆく背広かな
- 3 すれ違ふ坊つちやん列車淑氣満つ
- 4 読初のカリア戦記に大河あり
- 5 バンダナの子が駆けきたる恵方道
- 6 成人の日の靴墨のひかりかな
- 7 探梅のポケットにあるミントガム
- 8 春を待つ張子の虎の大きな目
- 9 流れゆく松ぼつくりに日脚伸ぶ
- 10 さるぼぼの大きな頭春立ちぬ
- 11 春寒し書架の奥なる「ゲバラ伝」
- 12 後ろから靴音バレンタインデー
- 13 くもりたるホルンを拭けば春の雪
- 14 うさぎの目ほどの木の実を植ゑにけり
- 15 恋猫と手鏡ほどの水たまり
- 16 橋をゆくキャンピングカー猫の恋
- 17 さざ波につづくさざ波春の風邪
- 18 かげろふへ短き橋を渡りけり
- 19 桃の日のテーブルクロス広げたる
- 20 初蝶と同じ日向に立ちゐたり
- 21 球場の真中に立てば揚雲雀
- 22 啓蟄の土嗅いでゐるブルドッグ
- 23 永き日の海のにはひの石ひとつ
- 24 少年を泣かす少年春の虹
- 25 豆の花独身寮のかたはらに

- 26 キューピーの眼の先のおぼろ月
- 27 履歴書は雲のあかるさ鳥交る
- 28 月の石より蛤に傷あまた
- 29 海みゆる珈琲店のヒヤシンス
- 30 パフェを食ふ男がひとり目借時
- 31 巢立鳥ひかりの粒を浴びゐたる
- 32 酒飲めぬ男に亀の鳴きにけり
- 33 わが顔の映るスプーン鳥の恋
- 34 アネモネと睡眠薬の紙袋
- 35 少年の遍路ホームに立ちゐたり
- 36 春愁の少しつめたき貝ぼたん
- 37 荷風忌のオムレツの黄は咲くごとし
- 38 校庭に茶山の光とどきたる
- 39 春惜しむ楽譜かかへてゐたる子と
- 40 夏立つや岩に置きたるモデルガン
- 41 五月来る森の中なる神学部
- 42 草矢打つ明石の海のまぶしさに
- 43 短夜やロシア映画に大き森
- 44 誰も見てゐず緑蔭のギタリスト
- 45 桜の実ローマのコインより小さき
- 46 独歩忌や土にしみゆく朝の雨
- 47 遙かより波の音して蟻地獄
- 48 カーテンの向うは夜やさくらんぼ
- 49 わが声の父に似たるよ蛭狩
- 50 松風に振り返りたる捕虫網

- 51 南風や星条旗立つレストラン
- 52 月見草小さき声の人とゐて
- 53 裸子の横のダックスフントかな
- 54 毛虫焼く炎一枝に絡みけり
- 55 アメリカの地図を開いて端居かな
- 56 夜濯のしばらく草の波うてる
- 57 夕焼やマリア観音まで遠き
- 58 拾ひたる空蟬楽譜よりまぶし
- 59 悪友が欲し大海に雲の峰
- 60 かたはらに古きオカリナ夕涼み
- 61 箱庭の家の窓みな開いてをり
- 62 夕顔のかたはらの子に名をききし
- 63 海峡のひかりに開く落し文
- 64 街の音かすかにとどく水中花
- 65 噴水のまはりのひかり恋果てぬ
- 66 ただ遥かなり先生と夏の海
- 67 文書かぬ日のつづきたる金魚玉
- 68 ゆふぐれの風に色あり夏みかん
- 69 「異邦人」読む風死せる突堤に
- 70 天の川にはとり白きまま老いぬ
- 71 海鳥の白さのノート終戦日
- 72 マラソンのゴールに大樹初嵐
- 73 自画像のうすき口髭秋ともし
- 74 終点の灯に鬼の子の揺れやまず
- 75 ペン持たぬ日の秋蝶のまぶしさよ

- 76 コンビニに男入りゆく無月かな
- 77 長安の旅の話を月の客
- 78 嘶きのわが身つらぬく水の秋
- 79 雁鳴くや皆うつむいて夜の駅
- 80 台風の眼に立ちゐたる阿修羅像
- 81 もうピアノ弾かざる指に水澄めり
- 82 晴れ男きて蓮の実の飛びにけり
- 83 夜の海へ傾いてゐる案山子かな
- 84 開きたる手紙あたたか黄落期
- 85 絡み合ふやうな鳥声柿の空
- 86 木守柿みゆる机を拭きにけり
- 87 どんぐりとマルコポーロの旅行記と
- 88 ジオラマのビルの灯れる神の留守
- 89 街の音いつとき絶えし落葉かな
- 90 電車来る前のしづけき雪蛭
- 91 ヘッセの詩口ずさみつつ日向ぼこ
- 92 レシート<sup>レシート</sup>の裏に詩を書く時雨かな
- 93 風見鶏ほどのかがやき枯芒
- 94 狼の亡びし山に一札す
- 95 指揮棒に新しき傷冬銀河
- 96 日輪の澄みて渡れる枯野かな
- 97 ライオンのたてがみ揺るる風邪心地
- 98 ポケットにきのふの手紙浮寝鳥
- 99 初雪の空を見てゐる神父かな
- 100 水鳥のかほの暮れゆく裕明忌

- 1 極月の旅荷に小さき献花など――
- 2 ぐんぐんと風邪にかたむくからだかな――
- 3 面接の窓に早梅探しをり――
- 4 てふてふにうすき砂丘の空気かな――
- 5 料峭の逢へばよそよそしき人よ――
- 6 ごみとなるまでしばらくは落椿――
- 7 春の野にただ突つ立つてをりにけり――
- 8 横綱のやうな態度や入学子――
- 9 平日の輝いてゐるつつじかな――
- 10 吉野家に頬杖をつき桜桃忌――
- 11 万緑に死して棋譜のみ遺しけり――
- 12 触れ合へば少しはづんで海月かな――
- 13 梔子や風強きまま夜となる――
- 14 堂々と汚れてゐたる網戸かな――
- 15 夜遊びに飽きしと露を煮てをりぬ――
- 16 だんだんと暮色の味となるビール――
- 17 冷蔵庫この世ならざる白さにて――
- 18 ボクサーを汗の果実と思ふなり――
- 19 供花として紫陽花の青褪せゆくよ――
- 20 緑陰を欲しがつてゐるダビデ像――
- 21 夕立の匂ふ包帯ほどきけり――
- 22 片恋の話ばかりよ更衣――
- 23 くちびるに神輿の揺れや祭笛――
- 24 秋扇と呼ぶるはうが似合ふなり――
- 25 角張つてゐるよ甲府（かふふ）の残暑とは――

- 26 炭坑節ならばと踊りはじめけり
- 27 立ち食ひの何でも旨き獺祭忌
- 28 秋雨の匂ひの取れぬカーディガン
- 29 くやしきの極みの栗を剥いてをり
- 30 爽やかに森を濡らして雨脚は
- 31 洞窟の画像眺めて夜業かな
- 32 人去つて夜露の丘となりにけり
- 33 空高きことにも触れて弔辞かな
- 34 立冬や会議室より運河見え
- 35 繁盛繁盛繁盛叫ぶ熊手売
- 36 いまひとつ乾きの足りぬ落葉かな
- 37 凧のこれは水辺のなまぐささ
- 38 雷蔵（らいざう）の眼鏡姿や冬ぬくし
- 39 船小屋で海を見てゐる霰かな
- 40 肌色の夢より覚めて冬籠
- 41 問ひかける言葉ばかりの賀状書く
- 42 人ごみに流されながら初笑
- 43 初旅の部屋の大きなテレビかな
- 44 待春の仮名で人と逢つてゐる
- 45 臘梅を見上げて使ふ敬語かな
- 46 何味か分からぬ飴や下萌ゆる
- 47 東風吹くや汝が三十の初恋に
- 48 水温むラッコにとほき余生かな
- 49 円陣のひとり直立竊れり
- 50 さくらさくら山羊の尻尾の短くて

- 51 白靴のはづかしきほどおろしたて
- 52 冷奴頼むさつさと口説かねば
- 53 ぽっかりと海の闇ある祭かな
- 54 やまももの種もあらはに踏まれたる
- 55 先生の白樺色の夏帽子
- 56 三十三回転にて黴の匂ひけり
- 57 片陰を引き剥がすごと出できたり
- 58 だんじりのてつぺんにゐて勃つてゐる
- 59 冷房や少年王の副葬品
- 60 先輩と大きく呼びびてアロハシャツ
- 61 枝豆のぬるりと殻を出でにけり
- 62 雑巾で拭きたる今日の神輿かな
- 63 蜻蛉の翅は映らず池の面
- 64 台風が来るぞ来るぞとマトリョーシカ
- 65 たたまれて秋日傘とはたよりなく
- 66 冬瓜にいつか行くべき旅のこと
- 67 朝露のうつうつと人うらやんで
- 68 炊飯器買つて良夜を帰りけり
- 69 林檎食ひながら林檎に飽きてゐる
- 70 金風や首にうるさき社員証
- 71 栗虫のしかばねとして丸まりて
- 72 馬肥えて三軒茶屋(さんげんぢやや)の交差点
- 73 銀漢の夜越山(よごしやま)とはよき名前
- 74 二の酉のすぐ見回せる社かな
- 75 湯たんぽにけふの怒りを注ぎけり

- 76 冬暁の小高き山として夫
- 77 三島忌のおみなごのみな脚長く
- 78 初雪の雨のはやさで降りつづく
- 79 拭くものがなくてふたりの日向ぼこ
- 80 初詣迎車するりと来たりけり
- 81 除雪車の過りて昏き車内かな
- 82 大寒のぬるりとまはる洗濯機
- 83 建国の日の嵩高き初校ゲラ
- 84 またの名はおにぎり山で春時雨
- 85 花時やあたたかさうなよだれかけ
- 86 いぬふぐりけむりは空を濁らせて
- 87 野球部の大きな尻も卒業す
- 88 つばくろや山の名前をよく覚え
- 89 春愁の極みのかほが鰻に似て
- 90 ちらちらと土筆環状八号線
- 91 黄金週間屋上に鳥居ひとつ――
- 92 カーテンのざらりと重く修司の忌
- 93 はつなつの出発ロビーとは眠し
- 94 人老いてラムネの瓶を開けてもらふ
- 95 花は葉にまたねと上手く笑はねば
- 96 避暑に来てそれは大きなデイベア
- 97 短夜に辣油一滴落としけり
- 98 手花火は頬を素直に照らしをり
- 99 氷水怒りはじめのゆるゆると
- 100 頬杖をついてゐるだけ夏手套

- 1 冬晴や青の届かぬ天の端――
- 2 その影のひとつ雀になる木の葉――
- 3 冬景色どれも故郷に似てゐたる――
- 4 水鳥の声一鳥を取り囲む――
- 5 親指のずぶりずぶりと蜜柑むく――
- 6 散つてゆく色づいてゆく冬紅葉――
- 7 白昼やみるみるまはるおでん酒――
- 8 最期まで適温の熱爛が来ず――
- 9 冬波に帆船の如き羽毛かな――
- 10 冬ざくら見上げおほかた空の色――
- 11 体より寒さ抜け行くと眠し――
- 12 木洩れ日を逸れる綿虫青くなる――
- 13 ほんたうの色に還つてゆく落葉――
- 14 猟犬に野生の匂ひありにけり――
- 15 うどんとは思へぬ太さ狩の宿――
- 16 冬薔薇棘の先まで深紅なる――
- 17 もう湯冷めしてゐる足の指の先――
- 18 霜柱さくさく踏み泥だらけ――
- 19 極月や海の底より波の音――
- 20 脱衣所の人通るたび柚子湯の香――
- 21 風花の止みてどこにも無かりけり――
- 22 雪になる雨の水輪の小さくなる――
- 23 一斉に振り向きさうな黄水仙――
- 24 風音に残る寒さのありにけり――
- 25 母よりも人に慣れたる子猫かな――

- 26 翻る火のうら暗き野焼かな
- 27 重なりし影の明るき春の雲
- 28 山仰ぎつつ耕人の休みたる
- 29 車避け結局春の泥を踏む
- 30 沖の明るさを目指せる春の波
- 31 雛飾るとき母のこと祖母のこと
- 32 揚雲雀どこかと傘を傾ける
- 33 大胆に人へ近づく春の鳥
- 34 春の風邪街燈なべて潤みたる
- 35 灯を消して水音のある春の夜半
- 36 山よりも麓の村に春の雪
- 37 春雪のところどころに屋根の色
- 38 春の風邪列車の浅き揺れに酔ひ
- 39 諸葛菜木洩れ日はいま午後の濃さ
- 40 正直に寝坊と述べぬ新社員
- 41 日かげりて華やぎかげらざりし花
- 42 山桜まで続きたるけもの道
- 43 花屑に埋め尽くされし筵かな
- 44 枝のすぐそばの空より散る桜
- 45 包み込む息の影ある石鹼玉
- 46 藤の香の房をしたたり落ちにけり
- 47 夏来る世界が青くなつて来て
- 48 若葉より幹の匂へる雨の森
- 49 木々よりも近き薄暑の空の青
- 50 紫陽花と水とひとつの閑けさに

- 51 街中の鉄勾ひ立つ梅雨晴間――
- 52 次々に猫の現る五月闇――
- 53 夏めくやうすみづいろの入院着――
- 54 トンネルに涼しく声の跳ね返る――
- 55 涼風の高さに赤子寝てをりぬ――
- 56 子を寝かしつけてやうやく夕涼み――
- 57 半透明な真夜中のなめくぢり――
- 58 残りたる器の水や夏料理――
- 59 家々の無ければもつと風薫る――
- 60 がつしりとビールジョッキの柄を握る――
- 61 喧騒の心地良くなるビアホール――
- 62 暑氣払ひなどと言ひつつ飲みすぎる――
- 63 カーテンの出たがつてゐる網戸かな――
- 64 芝生からむつくり起き上がる裸――
- 65 尺蠖のあたまはこつちだと思ふ――
- 66 額の上空を見てゐるサングラス――
- 67 人一倍愛想の良きサングラス――
- 68 車内まで届く明るさ夏の海――
- 69 外は雨木陰の中はあめんぼう――
- 70 水馬の岸へとどこかぬ水輪かな――
- 71 黒々と降り注ぐ夜の蝉の声――
- 72 夜濯の背中に話かけられず――
- 73 ころころと避暑地の天気変はりたる――
- 74 注いでゐる麦茶どんどん濃くなりぬ――
- 75 日輪と海一色の大夕焼――

- 76 腕の汗時計の形してをりぬ――
- 77 灯取虫止まりて壁の色となる――
- 78 火蛾を掃くことに始まる山の朝――
- 79 祭なる町をひとつにする音頭――
- 80 人の目のきらきら光る夜店の灯――
- 81 手花火の明るさ家族ひとつ分――
- 82 新秋の葉書にありし異国の香――
- 83 くるぶしに風の絡まる秋初め――
- 84 新涼や洗面台の水の影――
- 85 独りなる部屋のがらんと秋めける――
- 86 別人のやうな顔ある秋の水――
- 87 蟪蛄の猫の如くに顔洗ふ――
- 88 向いてゐる方へは飛べぬばつたかな――
- 89 増えて来し翅音に花野目覚めける――
- 90 秋晴の中なる蝶を消せる青――
- 91 地球いま水の静けさ星月夜――
- 92 空つぼのバスの明るき十三夜――
- 93 隙間ある戸からするりと月の猫――
- 94 首上げし鹿に緊張したる闇――
- 95 朝晩にバスが一本紅葉山――
- 96 鯉の背に止まるつもりの蜻蛉かな――
- 97 木犀の香りに慣れてしまふ午後――
- 98 馬追の鳴いてゐる長靴の中――
- 99 虫の闇つたなき声を拾ひたる――
- 100 虫鳴いて虫鳴いて夜のどこしなへ――

- 1 さきいかの売り上げほどの冬が来る――
- 2 ラガー等が笑う赤青マウスピース――
- 3 排尿に勢いついて冬に入る――
- 4 丹頂になりきる全身タイツの子――
- 5 大根干すお昼休みの理髪店――
- 6 人参のだいたい色の消えやすさ――
- 7 唾液腺ががん刺激する蜜柑――
- 8 湯豆腐の割箸だから乗れるから――
- 9 乳吸うように寒苺食う子供――
- 10 白熊はアダルトビデオ巻き戻す――
- 11 ねえきつとポインセチアが血塗れよ――
- 12 借物のリップクリーム冬の蝶――
- 13 クリスマス母の名字が変わります――
- 14 膝掛をして膝頭から乳化――
- 15 柔らかな体の話冬の靄――
- 16 牡蠣飯の牡蠣のちよっぴり痩せていて――
- 17 天狼のちぎりとりたいつけまつげ――
- 18 寒北斗バイオレットの糖衣錠――
- 19 階段にばらまかれてる冬銀河――
- 20 夫の手の甲の静脈冬木立――
- 21 毛糸編むフランス式の指使い――
- 22 骨盤の前後に歪む隙間風――
- 23 カラス三十羽ばらばらのそぞろ寒――
- 24 白菜のどこから水の湧いてくる――
- 25 豚肉がカリカリしだす寒厨――

- 26 丹頂になりたし禿頭赤く塗る――
- 27 地球儀のチュッパチャップス冬茜――
- 28 白鳥とシュークリームの赤い糸――
- 29 高齢のサイにサブリと胼薬――
- 30 雪靴や両足空に放り投げ――
- 31 靴下のかかといつも鎌鼬――
- 32 松過ぎて胃薬のビン空になる――
- 33 かがり火草蘇るためすする水――
- 34 日本は南に長し梅の花――
- 35 懐の九寸五分も冴返る――
- 36 祖母の手でポテトサラダにミモザ咲く――
- 37 喉の腫れ肩まで続く春の風邪――
- 38 春の宵ネット切断して笑う――
- 39 血液の動く音して凍返る――
- 40 雪解をマンホールから始めます――
- 41 接木する必殺仕事人らしく――
- 42 水温む歯ブラシ置いて口開けて――
- 43 つちふるや飛行機雲もたまご色――
- 44 雪割夫車道でもぐらたたきする――
- 45 粘膜の色なる君の春セーター――
- 46 頬の皴のばし風船膨らます――
- 47 毛玉浮く猫の吐瀉物花ぐもり――
- 48 バラバラとおたまじゃくしの四肢跳ねる――
- 49 「墮落論」二冊並べて風光る――
- 50 切りたてのアスパラガスの寝癖かな――

- 51 鉛筆を削る右手に新入生――
- 52 オレンジで痺れたままの舌に花――
- 53 春の色めく台形のコンビーフ――
- 54 緑着るあの飼主も草餅も――
- 55 耕すや柔らかき手のひらに肉刺――
- 56 水面にぬうと突き出る海女の尻――
- 57 擦れ違うことが苦手の熱帯魚――
- 58 キヤベツキヤベツ浴室に溢れだす――
- 59 背に沿わす果物ナイフ夏蜜柑――
- 60 白玉を吸う唇の分厚くて――
- 61 フランスの手話通訳者武具飾る――
- 62 買置きが底をついてる冷素麺――
- 63 三分も余計に茹でた豆ご飯――
- 64 血の粘度までに煮込みしハスカップ――
- 65 扇風機止めて静寂居座れる――
- 66 皿だけが冷やされている冷蔵庫――
- 67 青梅を洗う洗面器は真っ赤――
- 68 粒粒の緑の魚卵四葩かな――
- 69 薬局の擦った揉んだの蚯蚓鳴く――
- 70 結論はオレンジソーダ貫通す――
- 71 階段を人型香水降りてゆく――
- 72 顔のなき裸の女棲む鏡――
- 73 白服や鼻血ひとすじたらしつつ――
- 74 夏祭り鍋いっぱいゆでたまご――
- 75 土用鰻食う白寿の祖母といて――

- 76 極太の胡瓜会うはずの日曜――
- 77 ゆっくりと脱ぐの水着に砂数多――
- 78 たゆたいて海月になれるはずもなく――
- 79 日焼けして歯並びの白態とらし――
- 80 酢醬油のセピアをかけて心太――
- 81 血管の浮いたメロンの後頭部――
- 82 秋の金魚急いてお祭り騒ぎかな――
- 83 むき出しの鬼灯二の腕に余熱――
- 84 窓の一枚一枚を閉じて秋――
- 85 きりぎりすの編み針は二号ばかり――
- 86 ドッペルゲンガーいてもちんちろりん――
- 87 踊り子は老婆表情筋硬し――
- 88 月影の半径血管の直径――
- 89 踊り子に刺青ひとつ目の玉に――
- 90 案山子ならロボットアームの先にある――
- 91 爆音が漏れコスモスのヘッドホン――
- 92 竜胆や替えの下着は青ばかり――
- 93 枝豆のその硬玉は低反発――
- 94 むっちりと葡萄一粒噛み締める――
- 95 夜な夜な南瓜切る絆創膏の指――
- 96 露草や君の小指の味加減――
- 97 顔面の中心の傷赤い羽根――
- 98 列島を鋸つらぬく野分かな――
- 99 型紙の縫代ほどの昼の月――
- 100 木の実降る灯油タンクは錆びだらけ――

- 1 「コンビニの世紀コンビニで母殺され」
- 2 「花咲く邦画の遅いリズムよ金無い日」
- 3 「大腿部見せ酒でも飲むか Mishima - san の忌」
- 4 「経団連ビルに立ちバターまみれの気分」
- 5 「紳士的なビルの墓場と夜の鸚鵡（おうむ）」
- 6 「点検されすぐに飛びたつ俺の誠実」
- 7 「痰を吐き募金箱からアリスの声」
- 8 「車両は霧へここに舐めつくされた国旗」
- 9 「ナッツは苦く人工知能も肉持つ時代」
- 10 「冷えたデミタス学生それぞれ過疎に住む」
- 11 「善捨てよ鈍行列車の無垢の身体」
- 12 「先祖としてのゴキブリを想う首長演説」
- 13 「アイドルは力ほしがり歪む日輪」
- 14 「海月の感触侮辱のつづく職場の観察」
- 15 「草原消し去りハムレットたち日本で働く」
- 16 「重層労働射精のように走る安い車」
- 17 「生存拒絶のタルタルソースも満足の役場」
- 18 「宦官を演じ好調のコンピューターと島」
- 19 「国家屈伸し僅かな質量のルールブック」
- 20 「軽度の「平成」吐き出し元気な臭い酒場」
- 21 「この暴力！ 春のタクシー千代田区へ」
- 22 「不機嫌な事務はじまる千代田区が光源」
- 23 「コ、コ、コンサバタイプの陰（ほと）が永田町一丁目」
- 24 「青の広告鴉は無数の駅舎に眠り」
- 25 「それぞれ区別の炎をかかえ真昼のデモ」

- 26 学生は地獄へ黒い体はさゝ、さゝ、蛹――
- 27 楽な詩も売れ春は汚れた古書店街――
- 28 新幹線を巨石と思い震える犬――
- 29 帝都から首都へ多淫の犬に触れる雨――
- 30 大理石に唾液落ちてゆく赤のホテル――
- 31 冬のアパート性交の汗も正義のつもり――
- 32 アパート内に静かな勅を知らないか――
- 33 贅の時代の地上の俺と地下の鳩――
- 34 議題は漂泊高速化する俺たちの酒――
- 35 エレベーターに汗ばみ蕾となる政治――
- 36 議員は泣いて不自然な柔術の俺の国――
- 37 精神論の悲しさ最終列車は音楽吐く――
- 38 券売機前に娘の伸縮飯吐く俺――
- 39 重力選挙に植物となり一日過ごす――
- 40 忘れられてデパートに大豆のような男児――
- 41 扇風機つかむ腕の肥満の現代史――
- 42 平凡しりぞけ酒飲む背後の都市の滝――
- 43 姦土狂土に今日も悲鳴の鞆の群――
- 44 ラブソングも蛆の曲真夜中の安い蕎麦――
- 45 議事堂到着地の蛞蝓の青い記憶――
- 46 メガホンから所有流れて嫌な木ども――
- 47 青春解説しペンを持つ手は灯油臭く――
- 48 金増えてきて有権の俺の手にチキンの骨――
- 49 近未来へ神風のサラリーマンと雨にうたれる――
- 50 スーパーヒーローの筋肉はこれゝ、からゝ、の神――

- 51 万人創作世界の滝を浴びている――
- 52 〔人間独立〕ドラッグストアに満ちて夏――
- 53 全員無言コンクリートに鷲を描き――
- 54 深夜駅舎に不快なほどの白い鳥Ⅱ人体――
- 55 蛭一般公開陰気な時計を身に着ける者たち――
- 56 〔南島の少女工場生産のおでんを売る Tokyo〕――
- 57 〔眼球疲れメタルの東京なぜ現実〕――
- 58 〔面接会場に金属の獅子怒る自分〕――
- 59 〔注意！ 戦士が闇鍋をする法務省〕――
- 60 〔原始の食欲夜から夜へ韓国街〕――
- 61 〔寿司と満月喰う失ゝ、失業のゝ、アメリカ人〕――
- 62 〔眼帯の女が消えるドラマの平和〕――
- 63 〔カラフルに怒鳴る中年熱帯夜〕――
- 64 〔火炎となる午前靖国神社の柔らかいベンチに〕――
- 65 〔合成酒の胴体に触れ指は兵〕――
- 66 〔どぶろく波立ち性愛論のメカニカル〕――
- 67 〔おまえも悪霊桃を並べる歓楽街〕――
- 68 〔真実の車を潰しファウストは日系〕――
- 69 〔闇に寝てトーキョーの葉は逮捕状〕――
- 70 〔頑丈な弁当 占いとしての事務だよな〕――
- 71 〔覚醒から遠ざかり俺の骨を覆う外套〕――
- 72 〔ドル紙幣の空白を監視する四月の幼児〕――
- 73 〔鳥あつまる過食の家の冷たい庭〕――
- 74 〔ガキ共の暴行おわり光る桜〕――
- 75 〔緑の斜塔俺らに官能教える百舌鳥（もず）〕――

- 76 万緑の夜にアジアの螺子生まれる――
- 77 トマト腐る 緑の斜塔に立ち止まり――
- 78 狐怒鳴る 隷属の酒そそぐとき――
- 79 公園に自由なく大きい蟻を口に入れる――
- 80 俺の屈辱住む鉄塔の影の中――
- 81 蝗に生まれて同じ陸地があるだろうか――
- 82 「駅は、、、、火口だ。」袋の中のケーキは半額――
- 83 向日葵の美知るときに来る Hitler――
- 84 蒲公英に無限軌道はためらいの褒美――
- 85 過疎の村に巨大な鮫が山車である――
- 86 赤く照らされ欲のストウーパ崩れる祭――
- 87 昆虫自爆させ進む綺麗な朝の森のワーゲン――
- 88 能率的な肉親として鎮まる海――
- 89 書物地獄に蠅は交尾し首吊る偉人――
- 90 尿で毛虫殺し真夏の孤児は今日を飛ぶ――
- 91 獣姦の記録だろうか向日葵こわれ――
- 92 ブロンズの馬も言語の大花野――
- 93 黒土に手を入れ蛇との交尾は咎――
- 94 田舎放棄の女とともに踏み割る海胆――
- 95 レストランに俳人ども暗く無用な指揮――
- 96 句碑を見つめてほとんど軍用犬のような人生――
- 97 雑に桃喰い頭の中の二等兵――
- 98 木材を叩き少女はテミスの分身へ――
- 99 血の蛇血の鳥自転車でゆく廃工場――
- 100 現代言語のかけらとしては寒い村――

- 1 蝶が産む風とらんぷの塔くづす――
- 2 ふらここに青空を掠めた記憶――
- 3 鉛筆を凜ととのへ受験生――
- 4 卒業の椅子きらきらと仕舞ふこと――
- 5 澄む息のしやぼん玉ほどよく飛ぶよ――
- 6 呼び鈴のおくれて鳴れる桜の町――
- 7 妹の野遊びミュシャの花環編む――
- 8 レフト・フライ雲雀の空の円心より――
- 9 凧の糸繰るゆびさきのかぜつかひ――
- 10 風車にからまり古都を彩る風――
- 11 遠足のバスに眠る子双子座めき――
- 12 賢治詩集春の北斗が栞に欲し――
- 13 五月来る神童の膝やはらかく――
- 14 マウンドの聖域青嵐のなか――
- 15 虹の根のあたりが祖父の少年期――
- 16 籐椅子に伏せて仏語のうすき辞書――
- 17 恋文の作法を梅雨の間に忘る――
- 18 燕の子育つ音符のごと顫（ふる）へ――
- 19 白シャツに透けて眼鏡のジョン・レノン――
- 20 扇風機つけてポラリスとの交信――
- 21 背泳ぎの腕手旗信号に似る――
- 22 浴びながらシャワーの水の散弾飲む――
- 23 熱帯夜ギター弦の弛みやまず――
- 24 走馬灯祖母の背たちまちに縮み――
- 25 鳴らすたびギターが思ひ出すキャンプ――

- 26 トランプにうつすら甲虫の匂ひ――
- 27 七夕の天の水汲む観覧車――
- 28 あさがほが空の五線譜へと絡む――
- 29 かなかなの声を葉のやうに醒め――
- 30 補助線を引けば流星また流星――
- 31 いわし雲統べゆく放課後のタクト――
- 32 手に拾ふ音叉はあきかぜの鎖骨――
- 33 靴紐のいくつ解(ほど)けし運動会――
- 34 山葡萄ひしめく十六連符ほど――
- 35 林檎より洩れて童話のまちあかり――
- 36 仕送りの手紙が包む里のもみぢ――
- 37 秋深く人魚のカフェの灯の昏(くら)く――
- 38 私語つつましく初雪の図書館は――
- 39 蜜柑剥く作法それぞれ剣道部――
- 40 居眠りは詩の糧雪の窓しづか――
- 41 ストーヴを消す告白の支度のごと――
- 42 講堂や雪の向かうは馬車の町――
- 43 チェコ映画短く白鳥の夢か――
- 44 北欧の氷柱に音階のあらむ――
- 45 聖夜劇のいもうと星を司り――
- 46 方位磁針北指す枯野ずつと来て――
- 47 除夜灯りをり考古学研究室――
- 48 羽根取りにゆく青空へ梯子立てて――
- 49 茶話となり了(しま)ひの講義始かな――
- 50 手毬唄ときに異界の姉を恋ひ――

- 51 うすらひを割り明星の空を割る――
- 52 ひな祭部屋水牢のいろに昏（く）れ――
- 53 花冷の螺旋をくだり来る素足――
- 54 水置きて朝寝のひとの枕もと――
- 55 林檎の樹眠る間も花咲きこぼす――
- 56 海市指すためほどく手の淡さかな――
- 57 陽炎の彼方を祖父の舟過ぎし――
- 58 永き日の回転木馬の回転止む――
- 59 さへづりにまみれて金貨落ちゐたる――
- 60 アークード・ゲームに春の星潰（つい）ゆ――
- 61 恋猫の挟まる安酒場のピアノ――
- 62 銀貨賭けてビールの王冠を弾く――
- 63 雨の音のつづく千年かたつむり――
- 64 梅雨の夜を黄金の騎士歩みゆく――
- 65 地球儀の影に午睡の美少年――
- 66 幼くて母の日傘の影はみ出す――
- 67 逢ひにゆく氷菓の匙を二つ貰ひ――
- 68 背より抱きしむベランダの夜明けまへ――
- 69 おなじ空見てをり麦茶冷むるまで――
- 70 泳ぎ果て素描のやうに眠りゐつ――
- 71 昏睡の手がすいれんの夢を漕ぐ――
- 72 水のうへを花火の燦の流れゆけり――
- 73 手の甲を夜店の光る輪が照らす――
- 74 短夜の夢挽く銀のオルゴール――
- 75 旧居留区や七夕の星飾り――

- 76 朝冷は金の鞍置くごと来たる――
- 77 秋茜浮く弦楽の果てし野に――
- 78 林檎の実載せて旅路の膝となる――
- 79 画架立ちて人なき湖畔きりぎりす――
- 80 月仰ぐとき電柱のマストめき――
- 81 くらがりへピアノ曳きゆく黄落期――
- 82 霧退(すき)りゆけり汽笛を内包し――
- 83 夜学の灯と銀河鉄道の窓の灯と――
- 84 唐辛子切る魔女の儀に招かれず――
- 85 ランナーのごとく雪待つ交叉点――
- 86 雪が消す路地にチョークの魔法陣――
- 87 口笛やトム・ソーヤーに紙の櫓――
- 88 コート着て名画座へ星盗みにゆく――
- 89 冬帽子取つてバレリーナのお辞儀――
- 90 サークスの檻に木枯色の象――
- 91 手品師の手が凍蝶の屍をつまむ――
- 92 曲馬団去りし広場に寒星集ふ――
- 93 オーロラのひかり織る寒さと思ふ――
- 94 ラグビーの創口にあをぞら滲む――
- 95 日記買ふ箔やはらかきものを択り――
- 96 革手袋嵌む森番の祖父に肖て――
- 97 淋しさが狩人に笛作らしむ――
- 98 初詣祈りの長さきみに揃へ――
- 99 双六の宙の旅ゆく消しゴムよ――
- 100 紺うすく初星の空刷り出さる――

- 1 別離とは血の無き痛み冬の蝶――
- 2 初雪ややがて銀沙漠の十勝（とかち）――
- 3 沢庵や我が血の母系疼きををる――
- 4 詐欺師にも家に子のゐる蜜柑山――
- 5 寒玉子崩るささやかなる不幸――
- 6 鮭下ろす不貞断罪することく――
- 7 荒ぶるを生業とせむ冬將軍――
- 8 極上の大寒氷点下三十度――
- 9 ラグビーや縦横無尽なる外語――
- 10 銀狐駆く古き名前の古き森――
- 11 柏手の数ほど爆ぜる淑気かな――
- 12 節分や独身寮の静かなる――
- 13 立春の陽のくびすちを愛撫せむ――
- 14 曇色の指輪はづす日あげは蝶――
- 15 灰皿に積む待春の暇かな――
- 16 春愁や鍋の煮干しの目が曇る――
- 17 春うらら猫のいびきの求心力――
- 18 鳥の巣やしづかに山は孕みををる――
- 19 君といふ人体模型夏隣――
- 20 憲法記念日何撃つ指鉄砲――
- 21 酢の物を一斉迂回こどもの日――
- 22 寸胴鍋（ずんどう）に五月病ごと煮えてをる――
- 23 子らはみな無慈悲の巨人蟻を踏む――
- 24 青鷺の鳴けばジュラ紀の夜に戻る――
- 25 リラ冷えや夜着の喘鳴して哀し――

- 26 「をんなまつ踵磨きて梅雨に入る」
- 27 「夏料理箸の不作法は不美人」
- 28 「かつを食ふ目には前世の海の青」
- 29 「だんだんと脳（なづき）ふやける油照」
- 30 「やはらかき二十歳の翅よ晩夏光」
- 31 「ゆく夏の最後尾にて人を恋ふ」
- 32 「遠花火愛の蒸発して永し」
- 33 「虫鳴くや街灯ことごとく孤独」
- 34 「枝豆や銅鍋（あかなべ）ぐつと滾りをる」
- 35 「父の忌の煙草の匂ふ牽牛花」
- 36 「立秋の風と走らむ花電車」
- 37 「幾千のテールランプの盆に入る」
- 38 「間引菜のかがやきを食む朝餉かな」
- 39 「流星や我もいつかは古代人」
- 40 「急須より今日の始まる白露かな」
- 41 「高速バス蒼き更待月を追ふ」
- 42 「新米や裸婦像よりむしろがねに」
- 43 「みどり児の新しき靴秋の葬」
- 44 「初雪や神の骨より白きもの」
- 45 「寒濤や親なき子らの後退る」
- 46 「闇は黙死者にやさしき六花かな」
- 47 「乳房売るをんなの目にも寒の星」
- 48 「生きものの息なし生きてゆく雪野」
- 49 「冬の日の大鍋ずつととろ火なる」
- 50 「凍空や輓馬たてがみ振り上げて」

- 51 老猫や次の初雪までの日々――
- 52 独り居の夫婦茶碗の底冷えす――
- 53 不細工も愛されやすき寒莓――
- 54 出汁一滴血の一滴とする真鱈――
- 55 葱切つて切つて髪まで葱の香（かざ）――
- 56 寒北斗不惑の道の座標とす――
- 57 冬の靄無職の顎の固き髭――
- 58 年の夜や眠ることすら惜しき黙――
- 59 焚初や米粒ひとつづつ息吹――
- 60 病む胸に限りあるだけ満つ淑気――
- 61 初茜街は静かに宿酔す――
- 62 雪解川太く正しき尿（ばり）の音――
- 63 残雪の黒きを雪の骸とす――
- 64 鋭角に突き抜けてくる二月かな――
- 65 外つ国に座して青ぬた遠かりき――
- 66 無頼派の指にも指輪蚯蚓鳴く――
- 67 知恵の輪をほどけば薄し風の春――
- 68 春星に背中さすられてる喪服――
- 69 古傷の淡きひとすぢ花前線――
- 70 割箸の数だけありし花見かな――
- 71 五月雨やストレスに利子付いてをる――
- 72 地球といふ小瓶に満ちる夏の景――
- 73 リラ冷えや親になれないまま枯るる――
- 74 老猫の眠りしひげも海霧まみれ――
- 75 はつなつや少年羽化の低き声――

- 76 夏来たる厨は揺るぎなき炎（ほむら）――
- 77 夏の夜の震源テナーサクソフォン――
- 78 万緑や海竜いまだ眠りをる――
- 79 粘性の夏が喉（のみど）に絡みをる――
- 80 終の日や空は未完といふ白夜――
- 81 手花火を持たす子もなく家もなく――
- 82 隣人の性根のごとき胡瓜折る――
- 83 星涼しゆの字のまろきけぶりだし――
- 84 もう誰もいらぬと裸足より自由――
- 85 人ひとり灰になる朝日輪草――
- 86 きのふより別の乳房と寝る葉月――
- 87 爽涼はポケットの穴先んずる――
- 88 梨剥きて病室に満つ生氣かな――
- 89 遠花火影を半分づつ重ね――
- 90 飴玉を噛めば秋星滅ぶ音――
- 91 路線バス残暑ばかりを吐きだせり――
- 92 体温の高きをんなと夜半の秋――
- 93 秋冷や今朝も竈の火は烈し――
- 94 旅鞆皆それぞれの高き天――
- 95 神居らぬ休耕田や赤とんぼ――
- 96 はららごや腹の芯まで潮の渦――
- 97 甘藷炊く未だ父性のなき不惑――
- 98 太腕や箱いっぱいの秋刀魚買ふ――
- 99 竜骨の軋むこの国颪風来――
- 100 猫の尾の影伸び切つて秋とんぼ――

- 1 うつし世と夢で数珠玉投げ合ふよ――
- 2 雁来紅迷子の知らせ反響す――
- 3 せんさうは嫌鶏頭が増えるから――
- 4 試験管のうちはのはの傷実南天――
- 5 家ありて町の始まる落し水――
- 6 ギター教室蔦に吞まれてしまひけり――
- 7 秋祭開いて捨ててある漫画――
- 8 月天心夜市常常涎臭――
- 9 くちびるの縷々浮かびくる秋の川――
- 10 きつつききつつき好きだつて言つていい――
- 11 コスモスや海風を知らない体――
- 12 まだ新鮮な流星を拾ひけり――
- 13 栗から紅血階段を転がるか――
- 14 饅頭の割られて乾く夜長かな――
- 15 肉親の異国の言葉秋夕焼――
- 16 草の花悪事なす手のやはらかく――
- 17 星月夜遅々と古びる貯水槽――
- 18 骨のまだしつとりとして蔦かづら――
- 19 初紅葉鉛筆全て尖らせる――
- 20 月鈴子春画のおしりやはらかさう――
- 21 鶉包んで空白のあたたかさ――
- 22 地は親しきもの皂角子落ちなさい――
- 23 金柑は幽体離脱したこども――
- 24 全階に霧を吐き出すエレベーター――
- 25 歯の裏を舌でなぞりてをれば冬――

- 26 黒板を富士の冷たさだと思ふ――
- 27 冬館ノートの作者不明の詩――
- 28 セーター着て左の目から眠くなる――
- 29 ひさかたの冬日を浴びて出土品――
- 30 さむいから昔のよびかたで呼べよ――
- 31 鯛焼を食みてしづかに湿り合ふ――
- 32 玉子酒またひとり信長の死ぬ――
- 33 冬夕焼磨かれ抜きし泥団子――
- 34 にんじんようすうすとつらなる木々よ――
- 35 マネキンのあれは左手冬の浜――
- 36 ひよろひよろとされど蕪でありにけり――
- 37 冬の虹右手左手血のかよふ――
- 38 略されし裸婦画の四肢や山眠る――
- 39 赤いさざんくわ心臓が泣いてゐる――
- 40 片恋や冬のプールに手をつけて――
- 41 寒林をもつと獣になる走る――
- 42 手を伸ばしても凍星のとほくなる――
- 43 山茶花の花びらの影吹かれをり――
- 44 着膨れて電線の影踏みゆけり――
- 45 墜とさるる海鼠管足伸ばしつつ――
- 46 冬の星何度も削る永久齒――
- 47 湯たんぽのあはれ島流しとなりぬ――
- 48 白鳥や重ねて捨てて科学本――
- 49 弁当の偏り鳩の沈みゆく――
- 50 戻り来て営業車から出すジャンパー――

- 51 裏山のここにも竹が凍ててゐる――
- 52 黄ばみたる部室の壁や十二月――
- 53 ポインセチア文庫に絵葉書の葉――
- 54 クリスマスイブ棒読みの三博士――
- 55 クリスマスフォト怒られたあとだらう――
- 56 らふばいや空也の口のはんびらき――
- 57 包丁を正しく使ふ雪女――
- 58 白鳥を抱くや切疵作りつつ――
- 59 マフラーに雪玉包み持ちかへる――
- 60 恋愛至上主義者の日記果てにけり――
- 61 なまはげの手先がやけに美しい――
- 62 すいせん図書並びて残る寒さかな――
- 63 怪人の今際の射光冴返る――
- 64 オーボエと繰り返す唇に春――
- 65 夜の梅指より煙出す遊び――
- 66 きさらぎのころにくらき水素水――
- 67 冴返る指をはなれて硬き爪――
- 68 初蝶は九分九厘粉であり――
- 69 わづかだがどの雛も体温のある――
- 70 口笛に呼ばるる雨よ桜貝――
- 71 啓蟄や顔ぼんやりと餃子像――
- 72 木の瘤に水気ありけり卒業期――
- 73 春潮に指輪を返すときの音――
- 74 たんぽぽの最奥に齒のありにけり――
- 75 春の夜のふと足音の止む廊下――

- 76 番号で呼ばれ臚の部屋へ入る――
- 77 幽霊のこどもはしやばん玉の味――
- 78 佐保姫の体育座りしてゐたり――
- 79 また眠らう靴のきはまで春の泥――
- 80 春の雲・偏頭痛・糸引く光――
- 81 春の野の奥から墨となつてゆく――
- 82 太陽の塔のくちぶえ夏来る――
- 83 嘘つくはたのし白玉よく冷えし――
- 84 指に指熱し燕子花をつまむ――
- 85 はらわたのはじめてひかる蛙かな――
- 86 すこやかな恋愛パイナップルを切る――
- 87 さみしくて小指に來たかほうたるよ――
- 88 海の日の白熊一歩づつ狂ふ――
- 89 夏座敷広々使ひ死んでみる――
- 90 くだものをもらふ蟻ごともらひけり――
- 91 いつまでも砂の出てくる水着かな――
- 92 うなじさかみち明日アイスをおごつてよ――
- 93 炎昼や地球に釣糸を垂らす――
- 94 かんたんに木々の組まれる祭かな――
- 95 あした死ぬ金魚から掬はれにけり――
- 96 許すから怒らないから浮いてこい――
- 97 麻服のまだごはと抱擁す――
- 98 夏負けて空より活字降つてくる――
- 99 うすばかげろふ永遠にまちぼうけ――
- 100 既に百年の昼寝となりにけり――

- 1 さかだちのきかないここは衣更――
- 2 頭痛ばかりの街です春日万灯籠――
- 3 内輪差点線で描く春隣――
- 4 立春やまたスクロールバー探す――
- 5 三寒四温除霊されちゃったパン――
- 6 炎昼やグルテンフリーからフリー――
- 7 骨なしが骨より多い冬の虹――
- 8 紙皿に爪跡がある虫払――
- 9 夏期講座ばんそうこうを持っている――
- 10 舞茸が決めた光学スペクトル――
- 11 充電器いきをひそめる冬の波――
- 12 置いているだけのふたあり年の内――
- 13 延髓をひらいてみれば花の冷え――
- 14 志望動機はありません白牡丹――
- 15 種芋を握って戻すロスタイム――
- 16 地図上のつくしに包囲されている――
- 17 展開の速い結婚胡瓜揉み――
- 18 春の波夫が転びました立てるか――
- 19 さすまたに溜め込まれゆく熱帯夜――
- 20 燻製が飲み込めない雁来紅――
- 21 秋深し団地積めば二倍の団地――
- 22 ビリーズブートキャンプ二階から鰻――
- 23 ホチキスを外すでっぱり山椒魚――
- 24 秋冷や締め切り守るレズビアン――
- 25 異類婚姻譚注釈が夕立――

- 26 ひき肉を炒めて寄せる孟蘭盆会――
- 27 役または私を忘れそう裕――
- 28 お神輿にのらないつまりはのれない――
- 29 ポンズダブルホワイト踏絵はしない――
- 30 車椅子あつまっている春の宵――
- 31 白線と共にお待ちください弥生――
- 32 見本林鮪を握って並べていく――
- 33 ハンガーをかぶれば治る花粉症――
- 34 消防のファックス長い水温む――
- 35 二つ割りいちじくは何キロバイト――
- 36 関節で覚えよう縦列駐車――
- 37 半個室蟹がやってくるこない――
- 38 握力やつくしで埋める回答欄――
- 39 町役場椎茸で開く部屋がある――
- 40 バーコードバトラー放す夏の川――
- 41 電球を知らないこども平泳ぎ――
- 42 箸がありすぎるそれぞれの夕立――
- 43 骨粗鬆症ゆでてから桃をむく――
- 44 花守が語るだれそのなれそめ――
- 45 担当に代われませんうぐいす餅――
- 46 らっきょうの電圧で暮らしている――
- 47 風花や細いチューブを巻き終える――
- 48 ルーターの中にふくろう蓋閉じる――
- 49 白菜があるな掴んでも減らない――
- 50 ひとつしかないから道頓堀川――

- 51 鴨鍋や鴨以外ぜんぶ忘れる――
- 52 柿は種わたしは前世種だった――
- 53 露寒しフールボールをみつけた――
- 54 主語が鹿ゆるやかに膨らむカーブ――
- 55 傍点を指で隠して山眠る――
- 56 おおまかに分ければ柚子であることも――
- 57 味噌仕込むたましい少し味噌になる――
- 58 七五三みずうみに放てば民話――
- 59 火の用心みな踏みつけていくチュール――
- 60 軟骨を育てはじめる初冬かな――
- 61 冬の蠅うそつとときに訛りけり――
- 62 記念写真ひとつとばして寒椿――
- 63 牡蠣剥きや油粘土でつくる町――
- 64 隙間風文字を知らないひと踊る――
- 65 葛湯飲むほしいものなどなかった――
- 66 天ぷらの旅はみじかい御来光――
- 67 曼珠沙華手を差し入れてかき回す――
- 68 ほんとうの雪崩耳の中で雪崩――
- 69 寒中水泳あますところなく平面――
- 70 年忘れ音を左右に振り分ける――
- 71 練供養ひとに厳しいネオンテトラ――
- 72 汗疹とは治せる病平城京――
- 73 秋の園うすくひろげてゆけば国――
- 74 春火鉢絶えてもよいという軽さ――
- 75 歯列模型辿っていくと五月雨――

- 76 フラッシュを何度も焚いて蜆汁――
- 77 鈴蘭にかじられたところが痛い――
- 78 緯度の服では出かけられない夏霞――
- 79 缶の中あるいは缶を焼く焚火――
- 80 プールとは水のかたまり眠らない――
- 81 裏道のほうが有名冬日和――
- 82 通過する雨雲褒めて熱帯魚――
- 83 性的な落書きになるかたつむり――
- 84 みみず鳴く銜いのない宣材写真――
- 85 ゼリーこぼしながら血縁者の話――
- 86 フードコート踊がやってきて去った――
- 87 蕎麦掻を食う痴漢冤罪男――
- 88 注連飾数えるたびに数変わる――
- 89 後ろから抱いて引きずる松納め――
- 90 みそかつを数回噛むと残暑かな――
- 91 友好が途切れる前の春の泥――
- 92 事故に遭い目を開くこと波の花――
- 93 咳つぎの咳までに捕まえる咳――
- 94 膝に雪立ち上がればいつさいが雪――
- 95 春塵やかわいい人のいる紙幣――
- 96 ジャッキでは持ち上がらない春休み――
- 97 売るものがないこどもの日子がない――
- 98 鶏むねにめりこんでいく花の冷え――
- 99 砲丸を割れば栗飯新記録――
- 100 冬至ダイニングテーブルが狭いね――

- 1 ちよつとした仕草がすべて雪遊び
- 2 見せたいな雪が星座になるところ
- 3 返り花日差しにほつとしてゐたる
- 4 河豚の死に酸素を送る生簀かな
- 5 夕焚火来る人来る人みな黙る
- 6 落ち葉踏むガードレールを乗り越えて
- 7 マフラーで運ぶ缶コーヒー五本
- 8 動かない鴨を見てゐて動かない
- 9 馬小屋で糞すれば湯気クリスマス
- 10 寒の夜かりりと薄きチョコレート
- 11 もらひたるマフラー巻いたまま眠る
- 12 手袋にやさしい闇が五つある
- 13 重ね着の一部をコインロッカーに
- 14 正月や僕にも親がある不思議
- 15 読初の歌麿(うたまろ) 頁を破りさう
- 16 瞬き(まばたき) のできぬマネキン三が日
- 17 座布団の下で破魔矢が折れてゐた
- 18 七草に時間のごとき塩をふる
- 19 足元のヒーターてきぱきレジを打つ
- 20 陽のあたる場所に手袋忘れある
- 21 白息でパンク修理を覗き込む
- 22 雪下ろし見てゐる梯子を握りしめ
- 23 暖房をつけっぱなしで引き取りに
- 24 要人が来てゐるときの静電気
- 25 リムジンの曲がれぬ垣根落葉焚き

- 26 いま我はただのコンニャク湯冷めして  
27 吸殻（すひがら）を雪に埋めつつ救助待つ  
28 火を入るときに声かくおでん鍋  
29 髭面（ひげづら）の愛嬌ぬつとおでん屋に  
30 咳き（しはぶき）に片眉上がる試験官  
31 目が合はぬ自分の顔や受験票  
32 輝（あかぎれ）の手がぐしやぐしやの札（さつ）握る  
33 雪女郎骨の隙間に指入れて  
34 眠たさが満ち満ちてゐる暖房車  
35 三寒四温地球が照れてゐる  
36 如月の短さ恋文書き直し  
37 湯煙は常に流れて寒桜  
38 春立つや服に醬油の染み残る  
39 然（さ）る方に尋ねてみれば臥竜梅  
40 農具市今夜は俺が奢る番（おごるばん）  
41 犬の目に巨大な人や石鹼玉（しゃぼんだま）  
42 陽春の混沌として子供部屋  
43 もう一度キスしてダイヤ改訂期  
44 卒業歌くすぐつたくて反抗す  
45 浅蜷汁（ぺりー）は怖い人だった  
46 春の闇金庫の上に猫がゐる  
47 問診に嘘少し混ぜ春の昼  
48 病室の短き会話月朧  
49 穴あけて開く蜬のパックかな  
50 キッチンの小さな時計春の雷

- 51 キヤブションが「アスパラガスの最盛期」  
52 おにぎりの具までが遠き春野かな  
53 見送りしあとの余白を花流れ  
54 ぶらんこを見て欲しくつて雨の日も  
55 俯いてゐたなあ入学式の僕  
56 竿先のつつと花びら押し返す  
57 さすられてさみしき患部落花来る  
58 満開はどこを撮つても薄濁る  
59 ぽかぽかもぽかぽかも春長ける（たける）音  
60 黒髪を海に溶かして海女沈む  
61 本棚の裏で縮んでゐる風船  
62 あたつても死なない桜蕊の降る  
63 郭公が音声案内通り鳴く  
64 神々の多情多淫や五月来る  
65 梅雨に病むベッドの上の散らかつて  
66 父の日の雨に打たれて馬走る  
67 新緑や船頭に聞く出身地  
68 観光地的な値段の生ビール  
69 光るもの蛍と決めて酔うて寝る  
70 濡れてゐるホームの端や手毬花  
71 夏至の日の酒にサソリが漬けてある  
72 社に戻るソフトクリーム髭につけ  
73 噴水の前を動かぬバスガイド  
74 腰に手を回し合ひたるまま昼寝  
75 「十年間変はらぬ冷蔵庫の上は

- 76 籐椅子や然る（しかる）重さの全句集
- 77 かき氷たぶん虫歯が二本ある
- 78 昼寝覚猫が肛門見せにくる
- 79 手花火やころろ変はる好きな人
- 80 ただ量を減らしただけの夏料理
- 81 弁当が売り切れるまで炎天に
- 82 血管は川よりも山楸邨忌
- 83 夕立やクロワッサンのぼろぼろと
- 84 ナイターのつけてはすぐに消す点差
- 85 満塁で一本出ない暑さかな
- 86 かなぶんの愚直さが欲し母の前
- 87 踝（くるぶし）に蟻のチクチクバスを待つ
- 88 一人目が割ってしまった西瓜割
- 89 流木に木の重さなき秋の風
- 90 内定を葡萄を含んだまま話す
- 91 同棲や月を見ながら風呂屋まで
- 92 手触りがそのまま梨の舌触り
- 93 早生蜜柑やたらと届く編集部
- 94 ぽつくりとよそはれてゐる栗御飯
- 95 新米と気付いてゐるが言ひ出さず
- 96 酢の物が苦手で残す菊の宿
- 97 秋風のやうなり飲み屋街の猫
- 98 塾の子の腹減るころや星月夜
- 99 秋驟雨机の中はみな眠り
- 100 「セイタカアハダチサウ男の子は泣くな

- 1 靴尖らせて鷹狩を見に行かう――
- 2 フォーク眩しく涸川に刺さりけり――
- 3 日輪の痺れが麦の芽に移る――
- 4 鯛焼や崖はタオルのごと白く――
- 5 書けないペンで冬青空をこすつてゐる――
- 6 ヘアピンをつたはる鱈の港の息――
- 7 水鳥のうしろに鐘は現存せず――
- 8 首まはり寒しモノレールを浮かべ――
- 9 聖樹灯りて無声映画の戦艦など――
- 10 冴ゆる手はさぼてんの死をなぞりをり――
- 11 しはぶきを浴びし緑の魚の絵――
- 12 湯冷してアニメの未来都市尖る――
- 13 セーターや未明の海へ入る真水――
- 14 なはとびを鳴らしひときは薄い靴――
- 15 寒林へ鰐の匂ひを忘れゆく――
- 16 悴むや木の味の干貝柱――
- 17 夢に壁あり風花を匿はず――
- 18 立春の水路へ落ちてゆく羽毛――
- 19 梅東風の譜はみどりこの手を離れ――
- 20 山焼きて日暮るるまでの息の数――
- 21 チェロふかく鳴る風船の浮きはじめ――
- 22 こどもから黄砂へもどるときの声――
- 23 春の風邪とて木の椅子に顎置きぬ――
- 24 クレソンを目尻に地下にゐる一日――
- 25 紙皿のやうな現実春の雨――

- 26 音速は夜のはくれんを掠めけり――
- 27 喉渴きやすきピエロよ鳥曇――
- 28 山藤へつたなくも飛ぶガーゼかな――
- 29 葉桜のころ鍵盤は風を得て――
- 30 青芝に天使の痛覚のはなし――
- 31 そつとはじまる六月のループの疵――
- 32 巴旦杏水槽を夜のまはりつつ――
- 33 エディブルフラワー膝に零しぬ梅雨の月――
- 34 手をひらききる色町を夏の燕――
- 35 プールサイドほくろに声があるとしても――
- 36 花氷よりメキシコが溢れさう――
- 37 涼しさや小鉢の底に舌が届き――
- 38 八月や礼拝堂は鱗騒――
- 39 夕焼雲造花の茎をもつと拭いて――
- 40 ビジネスの眼で噴水を消しながら――
- 41 傾きし文字は零れて雲の峰――
- 42 朝顔の摩耗つづきぬ日曜も――
- 43 ナッツ噛むほど三日月が冷えてゆく――
- 44 音階をのぼる野分の夜の塑像――
- 45 飛行機の写真へ梨をひとしづく――
- 46 朝霧に釘を打ちつづける痛み――
- 47 舞茸を拾ふや舌の力を抜き――
- 48 光る秋蝶へ光らぬ秋蝶は――
- 49 飛び降りるなら秋風の曲がるところ――
- 50 塗る前の壁を愛してゐた花鶏――

- 51 夜の祈りひとかたまりの八頭――
- 52 行く秋のキーマカレーに合ふ照明――
- 53 返答を待つ静かさの朴落葉――
- 54 手は粉にまみれて遠し神無月――
- 55 冬鴟の唾液をもらふプレパレート――
- 56 星空を不意に失ふ鼯なり――
- 57 渋谷寒夜だれかの声がまつすぐ来る――
- 58 いつのまに爪は毛布と睦みあふ――
- 59 砂を巻く風のキャロットビスケット――
- 60 帯電したまま冬風を飛んでゐる――
- 61 欄干が口を汚しぬ雪催――
- 62 どうかしてゐる歌留多にひらがなは群れて――
- 63 鰯酒に一縷の鯖の沈むまで――
- 64 白息や砂場に豹のゐてほしき――
- 65 幾つものドア炭ぬちの火を悼む――
- 66 葉牡丹へ歩む鳩ゐて鳩の思惟――
- 67 野焼の火とも纏足の少女とも――
- 68 花粉症手は精密に手を描き――
- 69 川沿ひの家ひとつづつ眠たき春――
- 70 歌詞生まれくる中庭の椿かな――
- 71 地下道は洗はれ春の鹿を待つ――
- 72 陽炎や菓子にふくらむ小さき胃――
- 73 蜜蜂来用途不明の硝子器へ――
- 74 菜種梅雨砂場の砂の量を思ふ――
- 75 髪染めて水に浅蜷がずつとゐる――

- 76 桜葉降る隣室の在る限り――
- 77 猫の子の舌が運んできた頁――
- 78 海芋から患部へ泡のつづくなり――
- 79 水中を黙の走りて杜若――
- 80 眠前の会話に蛭のゐた温度――
- 81 靴紐を結びそびれて夏至の鳥――
- 82 次に来る車の遠さブルーベリー――
- 83 噛む茎も無く風鈴の洞に棲む――
- 84 目覚めた部屋に知識のやうに金魚鉢――
- 85 音消して碁を観る夏の雨の匂ひ――
- 86 鮎よりも昏し都バスの天井は――
- 87 虹消えて虹より遠き電池かな――
- 88 トマトより溢るる真夜の歩道橋――
- 89 目薬を振るは祭の昂るころ――
- 90 日焼子やひらたき石を嗅ぎて抛る――
- 91 蝸へ無言の雲を寄せ集む――
- 92 淋しい文明また枝豆をつまみあげ――
- 93 菊日和呼吸は煉瓦の壁に沿ひ――
- 94 くちばしへ駅の近づく秋の谷――
- 95 秋草にころんだままの古語幾つ――
- 96 色鳥やすべらかに減る飴の酸――
- 97 戦意喪失即霧をみごもりぬ――
- 98 ビーズ散らばる朝寒の甲板に――
- 99 曇天に鵜の芯の抜かれあり――
- 100 蘆刈つて肩甲骨は白いだらうか――

- 1 屋根裏に黄の繭の黄の蠢けり
- 2 唐突に唇触れるように春
- 3 新しき旅籠殖えゆく京の春
- 4 安吾忌にやたらに安いウキスキー
- 5 食ふために浅蜷に砂を吐かせをる
- 6 老人は「喂？」と詰めより沈丁花
- 7 人待てば花降る街の花の午後
- 8 ふらここの痕のみ深く深くある
- 9 また山は削られてゆき寒明ける
- 10 ものけの神社にうづくまる四月
- 11 人死んで煤煙の街花だらけ
- 12 走っても走っても街春終わる
- 13 コカインの王国立ち上がる五月
- 14 恋人と鶴を見に行く修司の忌
- 15 人をさす指で目に触る桜桃忌
- 16 美しき蠅の死体や映写室
- 17 青年と鉄塊交差して夏だ
- 18 夏に入る熊を放っているときに
- 19 万緑の中耐えようもない私
- 20 炎昼や街は間断もなく膨れ
- 21 林葬や葬列の背に浮かぶ汗
- 22 八月のまどろむ街の雑役夫
- 23 死んでいく百合湖に浮かべおる
- 24 雨の中駆け抜けてゆく祭りかな
- 25 叫んでは負けて真夏の孤独かな

- 26 万緑の中狼の話など
- 27 祝祭の街に鹿いる揺らぎかな
- 28 瞬きの間に老いて街に夏
- 29 日盛りに青年の買う月と銃
- 30 虎狩りの声叫ばれる夏に居る
- 31 忘れてはやがて形の盆参り
- 32 暗闇に明日を見つければ花火
- 33 さんばらと喚いて夏が通り過ぐ
- 34 一斉に少年兵は髪洗う
- 35 百日紅青年雨に曝されて
- 36 化け物と湖の花火を見ておりぬ
- 37 少女みな金魚泳がせゆく祭り
- 38 ふらついて帰る夜明けの救急車
- 39 どうやらきたない言葉を叫びつつ半裸
- 40 休日のサラリーマンの手首かな
- 41 汗ばんでおり一匹を葬って
- 42 火を放つ少年の背や明け易し
- 43 心中を見に行く姉の手の団扇
- 44 神の社荒れ放題に祭かな
- 45 万緑に呑み込まれゆく村と空
- 46 旧寺院裸者の懺悔の音静か
- 47 祝日のプールは浅き夜の匂ひ
- 48 海岸に鱻うちつけられている夏夜
- 49 肉屋の豚が俺を見つめる晩夏
- 50 雲の峰象死してなほ象遣ひ

- 51 夕立去る大使館から血の気配
- 52 診察を待つワラビーよ夏の果て
- 53 十月や花売る少女に花溢れ
- 54 洋梨を煮詰める全て放る日は
- 55 ジプシーの血が目覚めゆく月の朝
- 56 炭坑を吹っ飛ばしてる日のカンナ
- 57 少年の舌長くあり水澄みぬ
- 58 軀ごと愛されている野分中
- 59 短夜や少年無造作に脱いで
- 60 火の種を消して金木犀を嗅ぐ
- 61 蜻蛉の交尾めば鳶の伸びてゆく
- 62 子守柿戦艦一日掛け沈む
- 63 短日の駅に獣の影映る
- 64 白桃を眠らせておく夜だった
- 65 花芒人美しく滅ぶべし
- 66 半分の柘榴に指を潜らせる
- 67 北風や目をつむりつつピアノ焼く
- 68 鳥葬や紅のマフラー巻き直し
- 69 悔恨が俺を追い抜いてゆく聖夜
- 70 風花や犬を喰ふ犬見ておりぬ
- 71 虎の檻閉園のベル鳴り続け
- 72 おおかみに心臓食べられゆく呼吸
- 73 手袋の中は暗黒犀通る
- 74 絞める手のより強くあり深雪中
- 75 飢えている終点近きバスの中

- 76 凍る湖戦車砲塔だけを出し
- 77 ひたひたと鬼に成りゆく寒さかな
- 78 冬さうび抱かれて白き息となる
- 79 冬の雨遠くに紅き傘回る
- 80 額縁の担がれているクリスマス
- 81 短夜に襦袢の帯を締め直し
- 82 歩くたび世界が揺れる冬至かな
- 83 にんげんを堕ろせし人と年迎ふ
- 84 隼の統べて真冬の摩天楼
- 85 凍蝶の例えば君の真っ裸
- 86 煮凝になりかけている夜半かな
- 87 身籠もっている狼を見ず帰る
- 88 山眠る象舎から象消え去れば
- 89 異教徒の混じる大聖堂の聖夜
- 90 寒鰯の脂に鈍る刃かな
- 91 雪激し振り払う手の弱くあり
- 92 街は皆凍りて赤き信号機
- 93 ラグーンにペンギン眠る午前二時
- 94 山を焼く僕が傷つかないように
- 95 逃げている友人に爛つけるかな
- 96 鹿撃ちの銃身に雪薄く降る
- 97 人肉の焼ける匂いのクリスマス
- 98 雪国に成り行く夜の目合いか
- 99 湯冷めしており逆立ちして弟
- 100 むこうみずになれずに冬の花火かな

- 1 蓮の根を掴めば大地昇るかも
- 2 芹摘みの音のみを手に集めゆく
- 3 弦楽団三百年後月見草
- 4 歌はずに詩友は去れりはこべぐさ
- 5 帰るころ四、五人消えて湯屋めぐり
- 6 ねむる間もかすか胡桃の心臓よ
- 7 白秋忌のココアに浸す雲の先
- 8 二月空に煙が描く難破船
- 9 雪原に一つ火ともる他人（ひと）の夢
- 10 自転車滅世は一声に過ぎざるも
- 11 自転車燦滴るものに夕陽差し
- 12 自転車聖黒三角を包囲せよ
- 13 自転車暗瞳に梅を映し合ひ
- 14 自転車楽竹を接ぎ行く浄土道
- 15 自転車遊風呂敷を追ひ四界まで
- 16 自転車識言海に鱗を見失ひ
- 17 自転車呪母のふるさと花まみれ
- 18 自転車然雲の断面あたたかし
- 19 自転車宴鱗着（うろこぎ）のまま輪廻して
- 20 麦踏んで行く遙かなる教室よ
- 21 てのひらの御器に盛られし昼料理
- 22 足うらに耳持つ少女聖五月
- 23 まばたきの青太陽に鯖跳ねよ
- 24 曙光とはまづ神の目を横に裂き
- 25 死も死後も光よ虹を貫く汽車

- 26 薔薇紅き日の擬科学の煙かな
- 27 少年の後ろをこする羊雲
- 28 六月の真水を抜ける巨体あり
- 29 ひらがなは火で綴るべし夏よもぎ
- 30 へるめすと行く野薊の花の上
- 31 影の世やただ藤ばなを仰ぐのみ
- 32 掌に置けば創造見ゆる青胡桃
- 33 口中に蝶飼ふをとこ花野宿
- 34 てんぷらを都へはこぶ花ぐもり
- 35 つゆ草や百人姉妹笑ひ止む
- 36 空き家より空き家が覗く晴れ間かな
- 37 芹噛みて黒き眼を育てたり
- 38 「謹呈」の二字遊び出す梅の花
- 39 転覆の悲鳴かすかに春の沖
- 40 遙か寄す刺繍と思へ春の海
- 41 鶏頭を来て鶏頭を抜け切れず
- 42 罌粟畑を炎上の船加速せり
- 43 神真似て霧より蛇を掴み出す
- 44 昼月を見る千年の頬杖や
- 45 母の湯のあとに漂ふ花くるす
- 46 先師みな黒朝顔と言ひて死す
- 47 外套のなかの夕五時つばくらめ
- 48 子ら跳ねて金平糖の夕あらし
- 49 烏瓜ふと天球は静止せり
- 50 人消えるたび明るむや夏祭

- 51 煉獄の空を落ち来し黒揚羽
- 52 麦秋へ歌捨てに行く人の群れ
- 53 福音を開けば逃げる誤植ども
- 54 丸善を出て洋行の雲となり
- 55 つばめ来て偽史の国家を嘯くや
- 56 野鼠ら身を寄せ合ひて貴種の夢
- 57 いちぢくに眠る恵比寿を蹴り起こす
- 58 夢を練る棒のごときを握る夢
- 59 人体を出て奔流の天の川
- 60 機関車のこすれるたびに梅匂ふ
- 61 発光す林檎も産みの苦しみよ
- 62 椿投げ入れて真昼やがらんどろ
- 63 ダンテ忌の中庭に犬迷ひ込み
- 64 牛行くに遅れて進む牛の腸(わた)
- 65 たこてんや投げて捕らへむ蛭子神
- 66 梅咲けば悪霊一家まぶしくて
- 67 蛇と蛇むすべば尾から桃色に
- 68 熊のみが月下を濡れず帰り行く
- 69 薄切りのいるかも浜の宴飯(うたげめし)
- 70 秋野原とほく火摘みのをんなたち
- 71 死神に抱かれて靦の匂ひ充つ
- 72 ほらここにてづるもづるの原神話
- 73 空を墜ち行く中世以来の少年よ
- 74 皮膚病みの神ちらちらと火を漏らし
- 75 蕎麦の花むかし銀河を散りばめて

- 76 言霊のイメージとして柘榴あれ
- 77 輝きのアマテラス似の梨なるよ
- 78 罇入れて完成となる秋の空
- 79 一杯の茶に一円の鳶を嚙み
- 80 魚（いを）割いて虚ろの空を深くせり
- 81 水落とし落とし魚（いを）ただ空にあり
- 82 魚（いを）亡び始まる朝の一響き
- 83 秋天に哭く魚群（いをむれ）を遙か聴く
- 84 曇天の濁りを魚（いを）の影うごく
- 85 空に消す魚体よ青を塗り重ね
- 86 いっぱきの魚（いを）の頭（づ）を打つ稲びかり
- 87 空曇る遠近に魚（いを）こすれ合ひ
- 88 夕焼けの奥の火の粉よ魚（いを）に降る
- 89 天の水溢れむとして魚（いを）ひそか
- 90 舌の地図見せて大航海の友
- 91 あゝ金の一滴の血を揚雲雀
- 92 薔薇に薔薇近づけて得る偽（にせ）時間
- 93 描くほど未完に近づく鯨絵や
- 94 喝采のなかつてんぷらは昇りゆく
- 95 自転車に法衣からむも夏山河
- 96 愛し合ふ鰯は終末の空を染め
- 97 古代知ふと水甕に手を浸すとき
- 98 春風の奥より御器をはこぶ音
- 99 晴天にしばし焚書の煙文字
- 100 涅槃光かすかに差して夕の風呂

- 1 春泥を靴より剥がし教祖誕生――
- 2 ぶらんこに教祖降臨宣言書――
- 3 啓蟄や教祖やさしく夕餉食ふ――
- 4 藤棚のかをり教祖の服に染む――
- 5 陽炎に教祖溢れてゐる世間――
- 6 朧夜のこゝろを知つてゐる教祖――
- 7 教祖いま桜の輪廻に在るなり――
- 8 融解し啓示し春の夜の教祖――
- 9 霞より来る教祖讃えよ So be it.――
- 10 リラの庭教祖あゆみてひかりけり――
- 11 梅真白教祖しぐまに生きてをり――
- 12 時間に並行 春の雷追ふ教祖――
- 13 空間に並行 春の暁吸ふ教祖――
- 14 真理に並行 春の山道往く教祖――
- 15 神意に並行 春の憂鬱知る教祖――
- 16 我欲に並行 春の夕焼蹴る教祖――
- 17 啓示に並行 春の理科室去る教祖――
- 18 倫理に並行 春のみづうみ吞む教祖――
- 19 麗らかや教祖に傷の無かりせば――
- 20 春惜しむやうな教祖の薬指――
- 21 許されてゐる殺人は教祖の為――
- 22 殴られてゐる男性は教祖の為――
- 23 奪はれてゐる童貞は教祖の為――
- 24 買はされてゐる水晶は教祖の為――
- 25 嫌はれてゐる言ひ訳は教祖の為――

- 26 「ロマンスとしての教祖の夏来る」
- 27 「はつなつの教祖はまさにエスプリです」
- 28 「はつなつの 性 生 死 照る日に教祖」
- 29 「六月は教祖の力科学の力」
- 30 「偽の夏偽の教祖の偽証かな」
- 31 「公団や風死してゐる教祖遊説」
- 32 「薔薇呉れし少女に教祖笑みけらし」
- 33 「薔薇在るや教祖虚空を打ち 哭ぶ」
- 34 「村しづかバナナを筆り取る教祖」
- 35 「審美てふ李と教祖在り真白」
- 36 「信者水葬 流動的炎天下に教祖」
- 37 「信者水葬 回転する紫陽花と教祖」
- 38 「信者水葬 蛙を潰す教祖の目」
- 39 「信者水葬 手を灼かれゐる教祖かな」
- 40 「信者水葬 教祖と金魚屋の談話」
- 41 「信者水葬 教祖の夏に縊鬼のこゑ」
- 42 「信者水葬 暑く教祖の在る飯屋」
- 43 「山荘は仲夏教祖は息を止め」
- 44 「浮き出づる教祖の背骨水中花」
- 45 「教祖暗殺計画兼花火大会」
- 46 「戸を挟み教祖の愛を聞きにけり」
- 47 「戸の奥に教祖涙を隠すらし」
- 48 「戸をひらくとき教祖のみ坐りけり」
- 49 「戸を閉めて教祖の笑みを忘れざり」
- 50 「戸の先の教祖しづかに息を吐く」

- 51 流星の真下教祖は釘を刺す――
- 52 教祖高らかに笑ひて栗の落ちる道――
- 53 桃齧る教祖の指の白きこと――
- 54 鰯雲教祖の旅に渡りけり――
- 55 アノマロカリスの化石に教祖花野を想ふ――
- 56 美女を抱く教祖の傍を河澄めり――
- 57 教祖流離ふ雨もみぢなる家具屋前――
- 58 爽やかや竹林に教祖の哀歌――
- 59 棄てられてゐる傘を見てゐる葉月の教祖――
- 60 鬼灯を採る少年と教祖の帰路――
- 61 教祖哀歌 刈田に立つてゐる義兄――
- 62 教祖哀歌 しけ寒のなか浮木往く――
- 63 教祖哀歌 アンドロメダを見る義兄――
- 64 教祖哀歌 名月の下浮木往く――
- 65 教祖哀歌 いなづまを背に義兄の顔――
- 66 教祖哀歌 野霧に浮木往きてかへらず――
- 67 教祖哀歌 すさまじく義兄の失踪――
- 68 教祖哀歌 且つ散る河の浮木欠く――
- 69 芋虫をつゝく教祖の仏頂面――
- 70 懺悔する九月尽教祖の怒号――
- 71 実存の国に教祖は遊びけり――
- 72 鍵穴の闇に教祖が立つてゐる――
- 73 磨硝子教祖の顔の浮かびけり――
- 74 簞笥より鬼と教祖の溢れ出づ――
- 75 海原に教祖の背骨浮かびけり――

- 76 牡丹さへ教祖を慕ふ夜の来る――
- 77 おゝあゝと教祖の叫ぶ焼鳥屋――
- 78 右脳稚き教祖の雪兎に疑念――
- 79 教祖様仰る通り鯛焼が御座いません――
- 80 夜を寒み教祖のひとりあそびかな――
- 81 踊り狂ふいてふおちばと教祖かな――
- 82 色変へぬ松と教祖の恋文と――
- 83 童貞聖マリア無原罪の御孕りの祝日など教祖は知らず――
- 84 熱爛に教祖悶えてゐる月下――
- 85 氷海を眺むる教祖只管哭く――
- 86 鯨骨漂着 冬霧の奥ゐる教祖――
- 87 鯨骨漂着 教祖拾ひし吸入器――
- 88 鯨骨漂着 氷下魚を喰らふ教祖の背――
- 89 鯨骨漂着 緋の外套を脱ぐ教祖――
- 90 鯨骨漂着 教祖嘆きて罌の死――
- 91 鯨骨漂着 教祖のこゑに雪催――
- 92 鯨骨漂着 教祖のこゑに山ねむる――
- 93 世界的大寒波のち教祖笑む――
- 94 教祖踊らむとする吹雪のプラットフォーム――
- 95 闇群れてをり教祖いま声発す――
- 96 レーニンの肖像画に教祖「あつ」と言ふ――
- 97 厄年のをとこと教祖笑ひ合ふ――
- 98 でんきふのしたでかたらふけふそとをんな――
- 99 にっぽんのみんなけふそのおともだち――
- 100 ぼくは教祖刺し殺されてさくらちる――

- 1 夕時雨重たき星の草を食む――
- 2 白き湖落葉とろりと浮いており――
- 3 枯草や彗星のくる門の前――
- 4 枯木星赤き川よりのぼりくる――
- 5 白鳥のかすれる空のうすべによ――
- 6 雪うすき地に月面の香あり――
- 7 うすべにの雪わなわなと鈍の空――
- 8 雪ふるや寂しき星のまんなかに――
- 9 白鳥の海の白紙の大いなる――
- 10 海光のあちこち爆ぜて落下の兎――
- 11 産声のかたちに春の海しなる――
- 12 陽にすこし涙を足して春茜――
- 13 ぜんまいや陽にはかなさの指の痕――
- 14 古草の光を抱きうごかざる――
- 15 暗い目の奥に花咲く星まわす――
- 16 連翹や未明の星に雨のふる――
- 17 糸一本もつれていたり轉れり――
- 18 てのひらに陽の垂直やきんぽうげ――
- 19 ふつつつと星うかびこよ大夏野――
- 20 弓なりの山鈴なりの青時雨――
- 21 夏の草砥ぐ太陽の哀しみを――
- 22 少年の膝ののこりし青岬――
- 23 耳なしの山の夕立においたつ――
- 24 夕焼をとおり童子の白髪よ――
- 25 蝸や琥珀にうつす杜の影――

- 26 ちちふさや海やわらかき星月夜――
- 27 月煌々人家に穀のどよめくを――
- 28 白樺は仆れて小人らが焰――
- 29 黄身ひとつ滑り落ちたる夕花野――
- 30 うつつうつろなる芒よまひるの陽――
- 31 白木蓮ほのぼのうれて鳥の空――
- 32 鳥ほろぶ無風の古里の星まわし――
- 33 口中に鳥の臍を飼うや 寡――
- 34 灰白の異境をすべる一本足――
- 35 鳥窓や水晶丘に耳の風――
- 36 山鰯り河耀えり鳥女――
- 37 河女泣く鳥とりに見られなお――
- 38 かげろうの顔のつそりと手長鳥――
- 39 鳥とりの実る木々より乳根垂る――
- 40 時間苔すだく鳥闇わらわらと――
- 41 星商人鳥びつしりと実る木々――
- 42 うごめくや木は木々めくや星捨場――
- 43 鳥木霊せりびんびんとふゆる星――
- 44 おおどかに火水あがなう星喰い鳥――
- 45 あいのかぜ万華橋よりとりとりは――
- 46 とりとりの鳥とりここは万華橋――
- 47 とりとりの鳥とり万華橋たおれ――
- 48 とりとりと星くちうつし火水の木――
- 49 とりとりの鳥のとりこの声がする――
- 50 鳥絶えて万年空の黄水晶――

- 51 男来る橋また橋を虹にして――
- 52 常笑い男は虫に愛されて――
- 53 星砕くごとく静かに虫砕く――
- 54 蕭蕭の明るみ室の一つ虫――
- 55 美しい脚が四葩に延びて聲――
- 56 蒼穹や虫の十字を地に刻す――
- 57 闇に冴ゆ虫に崑崙みえてきし――
- 58 塵殖ゆる月光骨の佇立かな――
- 59 薄膜の空の果てより男虫――
- 60 虹の木にあまた虫ふるユウレシア――
- 61 口中の宮殿みがく虹男――
- 62 目耳口眉鼻月に虫がいる――
- 63 虫の笑みまろばす月をひそと舐め――
- 64 風紋に蝶ぶつかりて目に穴ぞ――
- 65 ぼっくりの虫の影もつほつ雲よ――
- 66 草々の蒼々星になる聲を――
- 67 轟音をふれあわせたる虫の空――
- 68 虫が統ぶ一閃空の眩しくて――
- 69 ころがってゆく海神の翅ひとつ――
- 70 雨音を陽にこめ虫は男になる――
- 71 万緑の森の奥なる風の獄――
- 72 ぐらぐらり光あらぶり風の獄――
- 73 風おらぶ森ぐわらぐわらと日の光――
- 74 ものいわぬ木々らぐんぐん影おがる――
- 75 ぐらゆよんゆんゆんぐらり影おがる――

- 76 どおんどおん木々のもだえる影の国――
- 77 木の光ぐんぐらり影かげおがる――
- 78 風おらぶお前は影だ影の国――
- 79 ぐわらがげら光おがりて影おがる――
- 80 ゆんぐらり風のまだらの影をふむ――
- 81 ぐわらがげら此処よりさきは影の国――
- 82 ぐんぐよん木々うめき木々ふりみだれ――
- 83 ゆんぐらりぐわらぐがげら影おがる――
- 84 神木のゆうらり男影おがる――
- 85 ぐわらがげら奎なる時の長い舌――
- 86 ぐわらがげら光 木 光 影おがる――
- 87 ぐんゆらり木の洞にすむ影おがる――
- 88 ゆんぐらりお前のうえに影おがる――
- 89 ぐんぐゆら影おがるぐらぐりるぐら――
- 90 ふりかえる木の舌ばかり ぐわらがげら――
- 91 一本の木が倒れある正気かな――
- 92 吾の影まだらもだらに影おがる――
- 93 葉から葉へ光どよめく影をはく――
- 94 万緑の光やつれる影おがる――
- 95 吾の影まだらの蛇と吾の影――
- 96 影おがる光を食らう影の吾――
- 97 うずくまり影のはだえの影光る――
- 98 影わらう影に背をむけ影になる――
- 99 ふりかえり木の一本を打つ光――
- 100 影の国ぬけ万緑の獄をとず――

- 1 蛩吸つて肺の一晩のみ明るし――
- 2 飛行船過ぎてまなこを涼しうす――
- 3 一人称くるくる変はる日焼の子――
- 4 炎昼で満たされてゐる写真集――
- 5 金魚玉落ちさう頸椎に触れる――
- 6 夏蝶をひらけば遺跡こぼれだす――
- 7 ブラインドひらりと黒白に眩暈――
- 8 くさかげろふ注射刺されるとき見ない――
- 9 逢はば殺さむ白玉を嚙んでゐる――
- 10 刺青のかがやいてゐる夏座敷――
- 11 夕立の一瞬たれも死に絶へる――
- 12 めざめれば咽喉に金魚の居た気配――
- 13 秘密云ふ西日に部屋を閉ぢ込めて――
- 14 ともだちを抱くこともある夏の果――
- 15 うたふとき夾竹桃が洩れてくる――
- 16 天の川かの運命をえらびたる――
- 17 永き夜の姉の鱗のかぐはしく――
- 18 本日の稼ぎおほかたが秋果――
- 19 観ることの漸近線や猫じやらし――
- 20 距離感の異なつてゆく秋の虹――
- 21 桐の実が脳内で鳴るやうな光るやうな――
- 22 痛覚をひとひら容れて水澄みぬ――
- 23 境目にゐて野遊びに呼ばれけり――
- 24 胡桃触るなじむほどふたしかな手――
- 25 冬菊に骨のやうなるきよらかさ――

- 26 こほる夜にこはれぬやうに眼をひらく――
- 27 あいさるることの歪みや冬苺――
- 28 ひかりひかり雪晴にぼくらは音符――
- 29 やすらかや毛布に名前付けてゐて――
- 30 白鳥に首たはめたる力あり――
- 31 たれからも等しき距離や百合鷗――
- 32 あかるさや冬の音楽室の椅子――
- 33 寒晴や生活力のない男――
- 34 素粒子のさらさら欠けて冬堇――
- 35 夕暮れにわづかな庄やミモザふる――
- 36 細胞のぴぴと殖ゑたる余寒かな――
- 37 春愁や箱に無数の映画満ち――
- 38 底辺と呼ばれてたんぽぽと笑ふ――
- 39 たんぽぽの首長く罰受けやすし――
- 40 雲雀ひだまり永遠にフリーター――
- 41 ぜんまいに魔法を籠めてゐるところ――
- 42 臓腑ひとつ欠けて浮きさう春の暮――
- 43 植物のやうにひとびと鏡騷――
- 44 罇に刻まれるまでひらくなり――
- 45 頭蓋骨置きこでまりといふ仮説――
- 46 鳥雲に入りたましひのすり替はる――
- 47 転生や軽さをえらびつばくらめ――
- 48 めくるたびちがふ陽炎立ちにけり――
- 49 性別の異なつてゆく雪解かな――
- 50 ストッキングやぶれつばなし春の花――

- 51 めざめても人の妻なりヒヤシンス――
- 52 さへづりに結ばれてゐる言葉たち――
- 53 真夜中やふらここのある喫茶店――
- 54 ひとつづつちがふ地獄や春の雨――
- 55 深夜ぜんまいするすると伸びまた縮む――
- 56 桃の日の息とめるほど近いこと――
- 57 素顔とかはらはらこぼし春の花――
- 58 リラ冷えや人妻と居るとき少女――
- 59 在るものは奪ふよ花図鑑ひらく――
- 60 きさらぎのサロメに授けられし皿――
- 61 問ひ詰められてパンジーが溢れさう――
- 62 春の雲すこし活字を含みたる――
- 63 倫理観なくてあかるい桜冷――
- 64 道に穴無限にひらく花の雨――
- 65 離婚のちひとのかるやか花なづな――
- 66 夏近し砂漠が好きといふ女――
- 67 背を割いて夏に生まれるワンピース――
- 68 藻の花や乳歯ほろりと落としてゆく――
- 69 凝（こご）るとき虹含みたる黴の玉――
- 70 窓はさみだれ火傷のやうに影おちて――
- 71 呼ばればほどけてゆける涼しさよ――
- 72 紫陽花の首ふたつ置き境界線――
- 73 夏雲や臍あきらかにして立ちぬ――
- 74 片耳にピアス無数や夏痩せて――
- 75 はつなつのひかりに滲みだす音符――

- 76 短夜に指輪煮られてゐたりけり――
- 77 乱歩忌や脳細胞がたりと嗤ふ――
- 78 手を引いてくぐる踏切夏の星――
- 79 蛾はらはら昏きかたちとして発ちぬ――
- 80 惑星の動きを賭ける夜店かな――
- 81 ひなげしの中を金星まであるく――
- 82 一面のひまはりに背かれてをる――
- 83 小鳥来て文脈揺らぎはじめたる――
- 84 月夜茸浮いて来るほど眼をきつく――
- 85 木犀や罪やはらかに降り積もる――
- 86 眼の合つてしまふ兎や連れかへる――
- 87 ほほゑんでをらねばくるし草の花――
- 88 コスモスがコスモスが咲き過ぎてゐる――
- 89 見られたり月下眼医の看板に――
- 90 なめらかな稲妻を匿つてやる――
- 91 はつふゆのワルツ影までのびやかに――
- 92 めくるほどからだなめらか鎌鼬――
- 93 冬林檎君を肋骨より生みたし――
- 94 水仙の一寸眼にして法師なり――
- 95 冬菫抱けばあざやかにこはれ――
- 96 金網に分解されて春の街――
- 97 ランドルト環欠けてつややか風光る――
- 98 恋すんで長き余生や桜餅――
- 99 映画観るやう人生をみて日永――
- 100 妖精の嘔吐や桜蕊ふりぬ――

- 1 陽炎也立入禁止区域前――
- 2 なくなった家を見ている子猫かな――
- 3 しゃぼんだま瓦礫の残る空地にて――
- 4 喜雨降るや除染作業の進まぬ田――
- 5 蟬しぐれここはノンフィクションだから――
- 6 六年の日焼けをしているドラム缶――
- 7 水星もひまわり畑みつめてた――
- 8 隠したいものの隠せず螢の日――
- 9 流された駅を透かして秋の海――
- 10 慰霊碑の白百合枯れたまんまなの――
- 11 犠牲者の名前照らして大西日――
- 12 ぐにやぐにやの茶色のパトカー枯葉落ち――
- 13 虫の音に「あの日」感じているところ――
- 14 地震二日春泥に残りし恐怖――
- 15 春雨に兄は電池を買いに行き――
- 16 ふらここもかげもなくなった――
- 17 かの人もかの人もまたマスクして――
- 18 たんぽぽの根はマントルを掴んで――
- 19 不安さえ隠しこんでる春の闇――
- 20 蛇苺指切りげんまんまたいつか――
- 21 春雲も詰めて避難区域去る――
- 22 部屋の窓拭いてもふいても花曇――
- 23 五月闇だまし絵みたいな森に行く――
- 24 草いきれ君と僕との秘密基地――
- 25 蜘蛛の糸絆、絆のコマーシャル――

- 26 「七夕や行くあてはどこにもなくて」
- 27 「バルコニー誰かに祈りを捧げては」
- 28 「白雨降る黒い感情流したい」
- 29 「炭酸の抜けた炭酸水の夏」
- 30 「微塵雨無声映画のナレーション」
- 31 「鈴虫やひとのひとりもない町」
- 32 「廃校と沈んでいったあの無月」
- 33 「原発を隠してすすき原は伸び」
- 34 「フクシマの桃よ心の底苦く」
- 35 「山百合や除染した土捨てる場所」
- 36 「雁とんで孤独になっているところ」
- 37 「名月が出口だったらいいなとか」
- 38 「あきつ飛ぶ別れるために絡み合う」
- 39 「つんとしたマッキー匂い新学期」
- 40 「しゃぼん玉進路希望も透明で」
- 41 「陽炎の中であなたがわらってた」
- 42 「髪洗ふ不安という名のシャンプーで」
- 43 「夏の大三角のsin求めて」
- 44 「机上論ばかりつぶやく夏休み」
- 45 「日焼けした♫不定詞のページかな」
- 46 「夏季補習ねじれの位置の君と僕」
- 47 「夏闇に四角い光吸い込まれ」
- 48 「もうトマト代わりに食べてくれないの？」
- 49 「道端のマーガレットと一年生」
- 50 「大西日「進路」の二文字燃やしたい」

- 51 闇螢白々しい嘘をついた――
- 52 鰭雲泡になって消えちやいたい――
- 53 なんとなく今日も過<sup>ご</sup>して癩<sup>れ</sup>祭忌――
- 54 嫌いにもなれずにラ・フランスタルト――
- 55 夜濯やこびりついてる自己嫌悪――
- 56 夕立や机に忘れた英和辞書――
- 57 噴水の浮力使って宇宙の旅――
- 58 手袋の分の隙間も嫌だから――
- 59 進学の話みかんの筋を取りつつ――
- 60 きつつきの音に合わせて英単語――
- 61 時差ボケでボストンの土地雪が降る――
- 62 画用紙の青がはみ出し冬の海――
- 63 初霜や私は海のもくずほど――
- 64 マンホールさえも聖誕祭を告げ――
- 65 Please の人もマフラーつけていて――
- 66 寒椿つぶせぬ小指の血豆――
- 67 春の土赤レンガのすき間すき間――
- 68 アネモネの種買ひボストン美術館――
- 69 朝寝坊シリアルはカラフルすぎて――
- 70 おはようと Good Night に去る燕――
- 71 夕焼けも眺めて自由の女神かな――
- 72 白鳥座地下鉄の路線図描き――
- 73 押し入れのスーツケースに春惜しむ――
- 74 全音符分の息吸い大試験――
- 75 盗み見た君の背中<sup>の</sup>その窪み――

- 76 「夜の秋送信ボタンの宙を舞う」
- 77 「この暑さダリの絵画を思い出す」
- 78 「毒キノコ盛ってもいいよあなたなら」
- 79 「秋闇や微生物さえいない海」
- 80 「不知火の静かな青よ鳥渡る」
- 81 「寒卵こんな現実抜け出そう」
- 82 「水銀の埋められし土地竹の春」
- 83 「水俣とふくしま結ぶ銀漢」
- 84 「怖いのは私たちかも秋桜」
- 85 「来る人も来ぬ人もいて秋祭り」
- 86 「秋夕焼角を曲がってみても道」
- 87 「初紅葉ピリオドはなかったように」
- 88 「春雨や私の肩は濡れたまま」
- 89 「「さようなら」言えずに残るラムネ瓶」
- 90 「本当も嘘もなんでもよくて夏」
- 91 「袋へと除染した土霧深し」
- 92 「滴りてしたたりてなほしたたりて」
- 93 「待宵や黄身のくずれた目玉焼」
- 94 「十六夜やなくなつてから気づくこと」
- 95 「天高し「ここまで津波は来ました」」
- 96 「蟻よりもちっぽけなものにおびえてた」
- 97 「フクシマと呼ばれそれでも桃が好き」
- 98 「胡桃割る悲劇のヒロインはやめて」
- 99 「野分立つわたしはここで生きますよ」
- 100 「“解なし”の解を探してヨット乗る」

- 1 朧夜の手首は腕をはなれたい――
- 2 枕辺にまた貌鳥の立つ気配――
- 3 白梅のまはりを時のとどこほる――
- 4 鶯を匿ふための身八ツ口――
- 5 かくされて雛のあそびを百千度（ももちたび）――
- 6 幼子といふかぎろひに近きもの――
- 7 かなりあかなりあはるのうれひをうたはぬか――
- 8 花時の指に冷たき阿闍梨餅――
- 9 飛花落花見失つてもかまはない――
- 10 神仏のしづかな咀嚼蝶の昼――
- 11 かるがると地を捨ててゆく雲雀かな――
- 12 蒿苣割るや星雲どつと回りだす――
- 13 ぼうたんの玉なす蕾目覚めるな――
- 14 新樹一叢掠めて地下鉄は地下へ――
- 15 大手鞠咲くテロリスト養成所――
- 16 正しさのなんと危ふきジギタリス――
- 17 うつし身のうつろほうたる湧きいづる――
- 18 わたし忌の夏蝶なべて狂ふべし――
- 19 桜桃忌つめたくほろびゆくチーズ――
- 20 眠剤のかそけき光百合の蕊――
- 21 うすべにの局所麻酔のさるすべり――
- 22 葛切の夜に擬態してゐる水か――
- 23 畜肉のゆつたり腐る冷蔵庫――
- 24 すはだかの羊まばらに夏の雨――
- 25 空蟬にかすかな夜気の満ちて引く――

26 瞼（まなぶた）にうすき黒子や星涼し

27  
夏の月しらしらと夜へ還り来る

28 手鏡に吐いてかげろふほどの息

29  
「カラフルに穢されて在る夏の浜」

30 微電流芳しパイナツプル食めば

31 降りしきるプールぬくとし息を吐（つ）く

32  
 するするとひらかれからすうりの花

33  
〔白粉の匂ひ阿蘭陀獅子頭〕

34  
角隠泉の底へまゐらうか

35  
夕焼の耿耿と何屠りたる

36  
放られて不滅の桃となりけり

37 雨脚の青白くさす真葛原

38  
 いうれいが茗荷の花を喰つてゐた

39 銀漢の残滓と思ふ嘔吐かな

40 熱の夜の枕辺を鳴くひぐらしよ

41  
溢蚊のいのち無色に打たれけり

42 半跏思惟月に降る雨甘からむ

43  
うつとりと肉（しし）をはなるる花野かな

44 片寝して颱風の産声を聴く

踊り字のうつむきがちのめのこづち

46 豆板の豆の断面冬に入る

47 うどんつるつる毎日が憂国忌

純化してうつろな驚よ

少年の捷毛を雪の来て触れず

東竜のなかには眞つ赤こ然えてゐる

- 51 初笑してあつけなく去つてゆく――
- 52 抜き出せば鳥類図鑑よく冷えて――
- 53 咳に覚めて鱗をこぼしをり――
- 54 風邪の耳いま海溝を墜ちゆくか――
- 55 覚めぎはに梟のこゑして空虚――
- 56 しろがねの匙春を待つさむげたん――
- 57 恋猫の壊れて直る仕組かな――
- 58 豆がちの豆大福や春炬燵――
- 59 蛇すでに出でたる穴か確かめよ――
- 60 水草生ふ情死のきはもそののちも――
- 61 巻尺のびつとをさまるつばめかな――
- 62 すかんぼや意外にとほく飛ぶ眼鏡――
- 63 目であつたところが痒い春の雲――
- 64 引き攣れの広がつてゆく海胆の夕――
- 65 うつつと花菜明りを吸ふガアゼ――
- 66 額に手をあてられてゐて春の鹿――
- 67 かんたんに人死ぬ寓話花いばら――
- 68 舞へ舞へと蝸牛の王の宣ふに――
- 69 きらきらと毛虫を殺め華鋏――
- 70 少年のくるぶし尖る椎の花――
- 71 雲垂れこめて街はおもたいゼリー――
- 72 長梅雨や飼はるることの気やすさに――
- 73 羊水の匂ひ知らざり冷し瓜――
- 74 未成年ひとり容れたる蚩狩――
- 75 あたま悪さうに氷菓を齧るなり――

- 76 目に入れて目薬甘し夏の月――
- 77 はんざきの水のそこひに吐く水は――
- 78 ほろびのちとはの晴天金魚玉――
- 79 開けても開けても海鳴りの夏座敷――
- 80 金魚の尾どこまで裂くる少年期――
- 81 はだかに剥かれ玉葱の明晰夢――
- 82 横貌の青年となるプールかな――
- 83 むつすりと日焼の腕を寄越しけり――
- 84 切髪の燦燦と散る天の川――
- 85 恋かも知れぬ下手な踊についてゆく――
- 86 芋虫の次も芋虫ですか 主よ――
- 87 まばたきがうまくできない鶏頭花――
- 88 草雲雀みづのけはひのただなかに――
- 89 藤の実のぞろりぞろりと知らない子――
- 90 それからのゆるやかな死後烏瓜――
- 91 冴ゆる月クリーム鎖骨までのぼす――
- 92 眠らねば鮫がまなこを嗅ぎにくる――
- 93 身じたくを終へて冷たき指環嵌む――
- 94 奈落よりイエスせり出す聖夜劇――
- 95 雷鳥のグリエへ冷えびえとナイフ――
- 96 暗紅の腑は狼に取つてある――
- 97 重箱の拭漆より霜の声――
- 98 春着解く荒荒と紅拭ひ取り――
- 99 雪を来てひらく獣の掌――
- 100 旋回の鯨よ炉心は燃えてゐるか――

- 1 足跡の海中に絶え初明り
- 2 汝寝ねて夜どほし冬の空があり
- 3 冬しんと筑波はうすく空を押し
- 4 金澤の睦月は水を幾重かな
- 5 鯉呼べば子供の来る氷かな
- 6 物憂げに寒鯉匂ひはじめたり
- 7 寒鯉朱身ほとりを湯にしつつあり
- 8 寒鯉の己が名知らねば火の如し
- 9 ゆゑに侘助水も己を不気味がる
- 10 山々に寒をあづけて去る日かな
- 11 水の中に道あり歩きつつ枯れぬ
- 12 物憂さも冬の渚へ出る程度
- 13 水の世は凍鶴もまたにぎやかし
- 14 窓の雪料理に皿も尽くる頃
- 15 君よこの夜を動かねば凍る水
- 16 立木みな枯れて油のごとき天
- 17 寒林を離れ立つ木も絶えし今
- 18 言葉冷たし草にかむさる雪よりも
- 19 肉食ひしのち山や川なんの冬
- 20 ばら撒かれ木端ざんざと暮るる冬
- 21 波止場その闇すら荒し夜目に冬
- 22 薄氷や畳が老いて吃りだす
- 23 枝がちの空も冷たく古りゐたり
- 24 闇白し幹が奥へと縦に続き
- 25 榛といふ名前に生まれさへすれば

- 26 春暁をしばし冷たき雲の空
- 27 一睡と芝焼きたるは同じこと
- 28 のぞまれて橋となる木々春のくれ
- 29 富士低くたやすく春日あたりけり
- 30 まんさくの拔身の花は痒からむ
- 31 疎密ある春の林の疎を歩く
- 32 奥行きに降りこむ雨や花薺
- 33 暁はかならず槇のおぼろかな
- 34 西国の人とまた会ふ水のあと
- 35 鯉抜けし手ざはり残る落花かな
- 36 掲げむとして空に置く花篝
- 37 疼痛のたとへば花の水面かな
- 38 在ることの不思議を櫟恋愛す
- 39 春や飛びつく砂鉄吾磁石汝
- 40 筆立に筆を待たせて春ゆきぬ
- 41 蜜蜂や夢の如くに雑木山
- 42 五月来る薨つたひに靴を手に
- 43 明るさに箒たふれし白牡丹
- 44 露と聞きまづは心の軋むかな
- 45 色だらうあるいは暗い立葵
- 46 雲甘く嶺を隠しぬ蝸牛
- 47 眠たさのあやめの橋を斜交ひに
- 48 菖蒲枯れ吊橋燃えてゐることし
- 49 六月に生まれて鈴をよく拾ふ
- 50 雲は雨後輝かされて冷し葛

- 51 瓜の花冷たし水の中の手も
- 52 棒の描く輪が花柚子と重なる
- 53 手に団扇宵の渚のあるばかり
- 54 風鈴の短冊に川流れをり
- 55 来て夜は沖のしづけさ蟬の穴
- 56 仏壇は真桑瓜より軽からむ
- 57 蟬常に遠しよ水の味して汝
- 58 真白き箱折紙の蟬を入れる箱
- 59 花魁草みな枯れてゐるまぼろしかな
- 60 夕立は浮きたつものと皿小鉢
- 61 はしやぎあひつつ夕立の縁へ逃ぐ
- 62 象老いてかの夕立を忘れたり
- 63 臆すれば切らるる蓮の花ばかり
- 64 空蟬の眼の紫も朝かな
- 65 夕暮は金魚の旬と昔昔
- 66 ややありて手花火を手放しにけり
- 67 戸を開けて待てば夏空のみありぬ
- 68 夕焼の煮詰まりし目をつむる人
- 69 虫籠の中の日暮や爪楊枝
- 70 夏の穠冷たく差し出されにけり
- 71 憧れて秋となる夏鳩時計
- 72 秋燕の記憶薄れて空ばかり
- 73 星空にときをりの稲光かな
- 74 あをふりかかる初秋の荒野あり
- 75 星々のあひひかれあふ力の弧

- 76 刻々と雨になる屋根花木槿
- 77 細筆の寥れて月の高々と
- 78 霧雨や吾を疎みては幾鏡
- 79 水に恋してより激しこぼれ萩
- 80 絵は生きてゐる秋草に身を浮かべ
- 81 西は西鶏頭持つて立ちたるよ
- 82 輪の如き一日が過ぎ烏瓜
- 83 冷たき戸秋の日は斜めに当たる
- 84 製図台夜通し秋の線引かる
- 85 秋深し充実の緋を身にまとひ
- 86 秋淋し日月ともにひとつゆゑ
- 87 十月を針の研究してゐたり
- 88 真昼から暗むは雨意の帰り花
- 89 草木に踵なれば人の秋
- 90 刈稻の光はあれど散蓮華
- 91 茸から糸でて南部鉄瓶か
- 92 山茶花に真白き布の被せあり
- 93 金沢八景腹這ひに冬来りける
- 94 寒林を遠く治めて天淋し
- 95 シュワキマセリ水中のもの不可視なり
- 96 針山の肌の花柄山眠る
- 97 枯蓮を手に誰か来る水世界
- 98 大いなる霜の左の現れたり
- 99 門枯れて名前が少しづつ違ふ
- 100 甘露煮がみなに届くよ霜柱

- 1 春愁やこゑを探してみづを汲む――
- 2 リヤカーの豆腐屋が来る春が来る――
- 3 恋猫のきのふとはまた違ふかほ――
- 4 横丁をはづれて壺焼の匂ふ――
- 5 色街の風たくはへて春コート――
- 6 羽ばたけば色生まれけり鳥の恋――
- 7 ふらここや人間はみな空へ帰す――
- 8 下向けば道はレンガの入試かな――
- 9 いちまいの湖へ帰雁のこゑ満ちて――
- 10 とつぷりと苗札の字の暮れにけり――
- 11 たんぽぽのたつぷりとあり子が転ぶ――
- 12 置かれては少しずらされ雛飾る――
- 13 先生はチューリップ抱き離任せり――
- 14 くびすちに花びらのある花見かな――
- 15 たちまちに船現るる海市かな――
- 16 古本を重ねて匂ふ櫛の花――
- 17 がりがりとなにかを喰らふ復活祭――
- 18 街へ出てそのにぎはひや遅桜――
- 19 ちりぎはをゆるくまはりぬ春の風――
- 20 生徒なほ先生が好きヒヤシンス――
- 21 酢醬油にやさしき甘さ花疲れ――
- 22 裸婦像は鴉をあつめ修司の忌――
- 23 行く春や帽子にそれぞれのかたち――
- 24 桜鯛海は持たざる色を持ち――
- 25 ゆふぞらをランプのごとく石鹼玉――

- 26 生きるにはふるさとを欲り夏蜜柑――
- 27 時鳥まぶしき雨を葉は抱へ――
- 28 島風を銀色と言ひ花蜜柑――
- 29 なかぞらを鳥の制する麦の秋――
- 30 かざす手の昏く端午の陽を統べる――
- 31 夕涼やみづにはみづの流れ方――
- 32 女滝より風したたかに生まれけり――
- 33 鳥声を薄暑の川へ展げけり――
- 34 薫風や車掌の腕のよく伸びて――
- 35 橋は木の匂ひを放ち梅雨晴間――
- 36 あをぞらのあを借りてゐる花樗――
- 37 草笛や世界に海の名のそれぞれ――
- 38 輪郭のぼやけてきたる氷菓かな――
- 39 小説のもうすぐ終はるハンモック――
- 40 蛾の焼ける音をしるべに夜の公園――
- 41 死してなほ綺麗なかたち熱帯魚――
- 42 溺れるにほどよき狭さ水中花――
- 43 日盛の硝子は色をもてあます――
- 44 朝焼やノイズのごとく岩に波――
- 45 あをぞらをくづして長し捕虫網――
- 46 先生はどんどん進み道灼けて――
- 47 鳴くに喉使はぬことも油蟬――
- 48 メロン食ふたちまち湖を作りつつ――
- 49 空蟬をはがせる指の瘦せてをり――
- 50 美しき高さありけり合歓の花――

- 51 砂浜はひかりを余し秋初め――
- 52 秋暑し額に眼鏡の忘れられ――
- 53 鳩吹の暗がりへ風吹き込んで――
- 54 あきらかに白磁の色を蕎麦の花――
- 55 しづかなる町を知りたし草雲雀――
- 56 朝顔や雨の匂ひの窓に触れ――
- 57 濡れてなほ純白であり棉の桃――
- 58 蟪蛄のまつすぐ立てる花のうへ――
- 59 刃毀れや失ひやすき梨のみづ――
- 60 秋の蚊の雨後はとりわけ血に飢ゑて――
- 61 沢音の常にしたしく杜鵑草――
- 62 素十忌や手水は竹の匂ひして――
- 63 県道はだらしなく伸び曼珠沙華――
- 64 実柘榴や触ればくづれさうな家――
- 65 川風をまつたり使ふ秋の蝶――
- 66 眠くなる素秋の川を聴けばなほ――
- 67 塔はたをやかに色鳥を飼ふ――
- 68 瀬音より鳥声大秋の暮――
- 69 火の終はりかけて流星通りけり――
- 70 散り初めて雨後の木犀よく匂ふ――
- 71 梅擬こんなところに家が建つ――
- 72 月白や家は屋根より衰へて――
- 73 さやけて母を起こしにゆくところ――
- 74 虫籠を湖の暗さの物置より――
- 75 おほかたの橋錆びてゐる紅葉狩――

- 76 あをぞらは花鳥を育て神の留守――
- 77 鎖が匂ふ十一月の公園は――
- 78 石路の花一步に寺の軋みけり――
- 79 花枇杷や雨後の墓石の澄みきりぬ――
- 80 自転車に胴体のある夕焚火――
- 81 綿虫や町暮れてより塔暮るる――
- 82 ひとこゑに夜の満ちてくる酉の市――
- 83 はつ雪や眼鏡はづせば好きな人――
- 84 凍星やチェロより音の滴りぬ――
- 85 冬川に透明といふ昏さかな――
- 86 凍鶴のこゑを旅の荷ととのはず――
- 87 夜となればまぶしき駅やポインセチア――
- 88 奪ひ合ふためのストーブ点けにけり――
- 89 読み終へて本に厚さや十二月――
- 90 しろがねの埃を払ふ漱石忌――
- 91 風呂吹のくづれやすきを愛しけり――
- 92 蜜柑剥くやうやう帰心失へば――
- 93 鴉鳴けり波の消えゆく淋しさに――
- 94 土産屋に土産虚しき冬日向――
- 95 天井の迫ってきたる避寒宿――
- 96 街ぎらつく置きどころなき手が寒い  
3
- 97 列車過ぐその終はりより悴みぬ 晩――
- 98 冬すすきいづれの川も海へ出て――
- 99 着膨れて橋は未来を語る場所――
- 100 風花を乗せ隆々とらくだの背――

- 1 穴五つあり昼顔の蕊の奥
- 2 耳打ちの蛇左右から「マチュピチュ」と
- 3 踏む音の石から草へ蚩狩
- 4 端欠けて光る昆虫用ゼリー
- 5 Tシャツの前にも後ろにも埴輪
- 6 青島麦酒喧嘩のままに皿を出す
- 7 蚊柱の揉みある研究室の前
- 8 母が子を組み伏せし像蜚蝶
- 9 教室の隅に三人裸なり
- 10 丘の上の見知らぬ踊り夏の海
- 11 水面にうつり紫陽花なほ歪む
- 12 青鬼灯電車に父と揺れゐたる
- 13 マンションの人が手を振る合歓の花
- 14 睡蓮の前ランナーの倒れ込む
- 15 帰省子の伏すや畳の稲穂めく
- 16 蒲の穂の押し返したる朝日かな
- 17 掌が桃を離れて柔らかき
- 18 マスカット体温計の先にある
- 19 泡立草車来たよと言ふ係
- 20 この鳶を越ゆれば変はる学区かな
- 21 子規の忌の鰻鮓が繋ぐ皿と喉
- 22 秋の夜の影絵の鳥が鳥を食ふ
- 23 母象の後ろ足秋なかばなる
- 24 水筒の氷の鳴りて椿の実
- 25 二回目の迷子放送秋の湖

- 26 流れ星靴を胸に抱いて寝る
- 27 似て非なるまんぢう二つ夜学子に
- 28 お手玉の木の実同士のぶつからず
- 29 檸檬置かれし卓布の裾の垂れ具合
- 30 過ぎてゆく貨車の J の字秋没日
- 31 伏臥よりはじまる匍匐月の冷
- 32 オカリナを十指に塞ぐ寒夜かな
- 33 四隅より垂るる蜂蜜冬はじめ
- 34 引つけてしばらく動きたるコート
- 35 ワッフルに四つの窓やビル寒し
- 36 残業の窓の枯枝炎めく
- 37 吹雪く夜のカヌレに一つつつ火口
- 38 大綿の過ぐ屈伸の膝小僧
- 39 沢庵で包む飯粒研修日
- 40 コンビニの聖樹が昼間から光る
- 41 クリスマスリースに跳び込めば夜空
- 42 太き目の小芥子も居りぬ年の市
- 43 いつまでも来ず寒桥の三打目は
- 44 餅臼に薬缶突つ込み宴果つる
- 45 歳晩や海驢の鼻の下の水
- 46 募金の母貯金の父や蜜柑むく
- 47 粥焦がす賞与得ぬまま退職し
- 48 湖凍る全紙全面崩御と書き
- 49 寒雀仁王立ちして枝細し
- 50 凍星や紙のパックに卵十

- 51 マフラーは黒夜行バス発着所
- 52 冬麗やアイロンに沿ふシャツの首
- 53 日向ぼこ靴のかたちを褒める人
- 54 ベーグルの狭き空洞冬あたたか
- 55 火を奪ふ神話を聞きて膝毛布
- 56 煎餅を割って匂ひや寒稽古
- 57 花八つ手茎のいきなり緑なる
- 58 竹馬を開いて犬の通り道
- 59 小春日の借りたき本を司書が抱く
- 60 焚火から一番遠い人と消ゆ
- 61 寒椿屈伸の数声に出て
- 62 皮蚤に三つの緑雪曇
- 63 セキュリテイ統括室に冬林檎
- 64 杵南天涙の位置に雨がきて
- 65 再起動すると結合春キャベツ
- 66 ヨーグルト掬へば崖のうららし
- 67 露の臺散乱夜行バスの床
- 68 黄水仙顔を叩いて学校へ
- 69 龍天に昇る蒸籠の隙間より
- 70 花馬酔木指ひんやりとしてきたる
- 71 洪水の夢見し朝の高苣はがす
- 72 ショー終へし海豹の手のおきどころ
- 73 蜆汁けふすべきことあとふたつ
- 74 座布団の近づく男雛女雛ほど
- 75 花の奥中華飯店灯りけり

- 76 芝桜埴輪の馬に短き尾
- 77 切るまへに揺るる豆腐や春の夕
- 78 初夏の花屋の前の男たち
- 79 垢擦りのベッド桃色修司の忌
- 80 葉裏みな爛れ蚊柱立ちにけり
- 81 我が影に葉の裏返る夏の川
- 82 青嵐ゲートボールの旗七つ
- 83 曇天やぺろりと菖蒲垂れてをり
- 84 イーゼルの脚筭のちよつと右
- 85 青鷺と出雲へ向ふ特急と
- 86 花卉二つつないでゐたる蜘蛛の糸
- 87 跳躍の短き雀立葵
- 88 大西日うしろに運ばるるカレー
- 89 全員が九時寝五時起きジギタリス
- 90 サルビアや車が母に道譲り
- 91 ラジオ第二体操蓮池を囲み
- 92 青林檎服を掴みしまま眠る
- 93 両側に本を支ふる青林檎
- 94 山羊の尻左右に険し花梯梧
- 95 行々子朝の街灯濡れてをり
- 96 蟻地獄遊具の鶏の眼の虚ろ
- 97 吹き抜けの風は偽物百日紅
- 98 鼻押せば怒り出したる蚊遣豚
- 99 入浴剤かき混ぜし手の日焼かな
- 100 尾を振つて肛門見ゆる西日かな

- 1 地下鉄の下に地下鉄あおみどろ――
- 2 キョウチクトウ嫌いな人の名が綺麗――
- 3 校歌っていつも嘘つき晩夏光――
- 4 セロリ噛むひとつの恋を終わらせる――
- 5 春風のすつとんきように救う罪――
- 6 クリスマスまだ点いている倉庫の灯――
- 7 鬱になるちよっと手前の白すみれ――
- 8 円座という島にひとりや星を見る――
- 9 反省の色ってたぶん石路の花――
- 10 あめんぼが言うならここも海だろう――
- 11 立春や封筒の糊まつすぐに――
- 12 ただ咲いているだけなのに彼岸花――
- 13 小寒やまた深爪をしてしまう――
- 14 月涼し女子ってみんなエイリアン――
- 15 菜の花が夜に埋もれず咲いている――
- 16 コピー機の今日もうるさく今日も梅雨――
- 17 あぶらぜみ言葉の意味を破壊する――
- 18 人よりも猫は賢く望の月――
- 19 罌粟を蒔く睡眠薬が効かなくて――
- 20 廃校にピアノが残る二月尽――
- 21 父子（おやこ）です鮫にわくわくしています――
- 22 水芭蕉表彰式にいつもの子――
- 23 すっかりと丸い消しゴム大晦日――
- 24 寒鯉やダウンロードの待ち時間――
- 25 ねこじゃらし性善説を信じたい――

- 26 由来さえ分かればこれも盆踊り――
- 27 燕の子まだ雨の日を知らないで――
- 28 つくづくとパンダは熊の目付きかな――
- 29 なぜぼくはぼくなんだろう春の海――
- 30 そつと君メガネを外す神の留守――
- 31 手品師の一瞬真顔ほうせんか――
- 32 全世界共通語として風光る――
- 33 鍵っ子の鍵の重さや雪積もる――
- 34 夏草や手首にそよぐ友の傷――
- 35 紅葉かつ散る人それぞれというコトバ――
- 36 室の花真顔に戻るエレベーター――
- 37 古書店の百円ワゴンすべりひゅ――
- 38 春宵に画鋏でとめる写真かな――
- 39 白々（しらじら）と人に生まれて桃を剥く――
- 40 十三夜結びそこねた小指かな――
- 41 「Eureka」（ユリイカ）となぞった先に冬の蝶――
- 42 侵略のように向日葵畑かな――
- 43 雲の峰研究しないという自由――
- 44 夏至来る（きたる）まだぶらぶらとしていたい――
- 45 絶交のあとの身軽さ冬の浜――
- 46 葉袋の重さ変わらず鳥渡る――
- 47 卯の花腐し体育館にホイッスル――
- 48 フルートの肺活量で白鳥来――
- 49 ラムネ飲む空がしずかになっていく――
- 50 致死量に達するほどの夏の雲――

- 51 アイスティー飲みたいく雨に降られたく――
- 52 青嵐下の名前で呼んでみる――
- 53 からあげはもう無くなって日は短か――
- 54 柚子実るみなごつごつの笑顔かな――
- 55 紫陽花や心療内科というコトバ――
- 56 霾るやラッシュアワーに同じカオ――
- 57 村雨や短所ばかりが思いつく――
- 58 百日紅ものすごいって嘘くさい――
- 59 履歴書に空欄多い夜長かな――
- 60 不機嫌な日にあたまから鰯食う――
- 61 教室で狼を飼う羊かな――
- 62 青春の青を勝手に染められて――
- 63 おそらくはボーイソプラノ銀やんま――
- 64 日々という風蝕に立つヒヤシンス――
- 65 菌みがきの仕上げに秋の空を吸う――
- 66 鉛筆を削りながらに春を待つ――
- 67 答え無き夏の一本道を行く――
- 68 蛍火やE D Mの鳴る車――
- 69 桜って生まれながらに調律師――
- 70 万緑を一気に揺らすギタリスト――
- 71 正しさよヨットが暗い海わたる――
- 72 針の無い時計のように冬の池――
- 73 杉の花なみだのための嘘として――
- 74 台風が近づいている 手をつなぐ――
- 75 鼻歌とおなじ明るさシャボン玉――

- 76 「なぞなぞの答えのように蝶が来る」
- 77 「風邪引くや昼の時計をじつと聞く」
- 78 「とりあえずビールとりあえず生きている」
- 79 「人生はデッサン止まり冬バツタ」
- 80 「後悔に銀河の隅がふさわしく」
- 81 「行く末を知らずに駆ける豚の汗」
- 82 「冬ざれて世界はダンボールのなかに」
- 83 「荒星や一点足らず不合格」
- 84 「霜の華最後に笑ってくれました」
- 85 「かぶとむしあの頃バカと言ひ合えた」
- 86 「カラオケで人が死ぬ歌八月来」
- 87 「いままでの嘘のぶんだけ薄荷刈る」
- 88 「またねって言われたきりの無月かな」
- 89 「制服の白きゆうくつで夏木立」
- 90 「お互いに初めて私服さくらんぼ」
- 91 「空想に尾ひれが付いて夏の夜」
- 92 「頼杖で伏目でバレンタインデー」
- 93 「女郎蜘蛛の卵塊秘めるクラス委員」
- 94 「ふきのとういじめられっこいじめっこ」
- 95 「万物は水彩にして夏の朝」
- 96 「はだれ雪もつとも人を遠くさせ」
- 97 「素描という孤独な時間紀音夫の忌」
- 98 「鳥帰る卒塔婆のように並ぶ本」
- 99 「ドアノブはドアの向こうを知らず春」
- 100 「青き踏む証明写真撮る顔で」

- 1 咳をするたびにオリオン座がうごく――
- 2 なまこ嚙む空気のように集まりて――
- 3 セーターに海満たそうと脱いでいる――
- 4 枕だんだん温かくなる冬の波――
- 5 迷いこむ鯨に話しかけている――
- 6 鯨去り襟に刺繍の戻りくる――
- 7 みぞおちを白菜のため空けておく――
- 8 鈴落とし冬田の先に冬田かな――
- 9 梟が聞こえてくるころ茶がぬるい――
- 10 前髪を切りそろえる日のうさぎかな――
- 11 枯園のあちこちに椅子かたまりし――
- 12 鯛焼きの袋の絞りやすきかな――
- 13 冬休みゆっくり部屋を切る鋏――
- 14 ポインセチア母に洗札名のあり――
- 15 マトリョーシカの箱開けきって皇居かな――
- 16 寒椿人に冷たい手で触る――
- 17 争いは好まぬスケート場つくる――
- 18 はじめから悴んでいる赤い靴――
- 19 時計のない部屋に置かれてひび薬――
- 20 空箱と思えば雪の降りやまない――
- 21 真夜中の顔に水餅沈めたる――
- 22 恋猫は接写するたびぶれており――
- 23 みな口を小さく持ちて伊勢参り――
- 24 如月のかかとが夜を連れてくる――
- 25 啓蟄の重く鳴りたる時計かな――

- 26 しらじらと崖晴れてくる卒業歌――
- 27 シンバルを白黒写真のように持つ――
- 28 春雨の前から白い動物園――
- 29 三桎の花手を引いて手を引かれ――
- 30 やわらかいケーキの箱に立つ陽炎――
- 31 鉛筆を尖らせ春の無線室――
- 32 朝刊の薄い日に見るむつごろう――
- 33 ペたんこの袋で見に行きたい仔馬――
- 34 貨幣のようなおにぎり食べる桜かな――
- 35 父親はくぐって入る雛の間――
- 36 花莫蔭の沖に向かってゆく眠り――
- 37 たそがれの船はうごかぬうごいている――
- 38 泣くときは牡丹のような肺である――
- 39 ゆつくりと裏からめくり錦鯉――
- 40 からっぽの檻かたつむり出ていたる――
- 41 蓋ゆるく開けたるタベこいのぼり――
- 42 埋葬のようにレジ開く半夏生――
- 43 あやとりの橋ひらく指涼しかり――
- 44 芍薬のそばでもう一枚羽織る――
- 45 入口に少し階段ゆすらうめ――
- 46 夏帽の上から傘をさしている――
- 47 蜜豆のそばでくずれる絵本かな――
- 48 すべり台の途中に座る夏の雲――
- 49 木星の心地で噴水見ていたり――
- 50 白靴を貝殻のようにぬいでくる――

- 51 泳ぎだす背に続いていくひかり――
- 52 神様の休みどころや蟻地獄――
- 53 摺り足の近づいてくる日射病――
- 54 みな鰭を隠して座る木下闇――
- 55 夏痩せの折り鶴の腹ふくらます――
- 56 夏痩せの人の大きな影が伸び――
- 57 釣堀に裏返っているもの多し――
- 58 籐椅子は回転木馬のように鳴く――
- 59 ごきぶり叩く芯のない筒づくり――
- 60 百年は泉のごとくランプさす――
- 61 賭け事は肩につめたき蟻のせて――
- 62 タクシーでずっと握っている日傘――
- 63 ハンカチは都会のにおいさせており――
- 64 空蟬や紙飛行機の跳ねて落つ――
- 65 向日葵のさまざま割愛されており――
- 66 夕焼くる犬を一匹洗い終え――
- 67 暗幕を開いて馬を冷しおり――
- 68 終戦日みな牛のように眠る――
- 69 ひぐらしを壊さぬようにスープ飲む――
- 70 おしろい花眼鏡をかけた目が小さい――
- 71 草ひばり瓶から空の開かれて――
- 72 蓋取ればインク真っ青震災忌――
- 73 中元をかすれた声で受け取りぬ――
- 74 中元の箱展開する白さかな――
- 75 星抱えきれなくなって硯洗う――

- 76 秋の蜂白いペンキを塗りかさね
- 77 切符持つ人順番に羊雲
- 78 転校生孔雀の羽を拾いたる
- 79 ひきこもる犀に秋雨はじめから
- 80 台風のうら映写機のはたらきぬ
- 81 中心は傷ついてない花野かな
- 82 渡り鳥が焼きついている家族写真
- 83 ちり紙の軽さで鹿の待っている
- 84 石鹼を乾かしている子規忌かな
- 85 十六夜にあかるくしたる膝小僧
- 86 紙たくさん拾い集めて小鳥くる
- 87 ほおずきを薬師如来の手で受ける
- 88 襟足の涼しいコスモス畑かな
- 89 水玉の一つを鹿の出できたる
- 90 糸電話のコップを重ね夜食とる
- 91 まあたらしい星座にまぎれ夜学の子
- 92 霧の窓こちらの本は乾いている
- 93 映像を絞りつくした檸檬かな
- 94 赤い羽根つけてかさぶたが分厚い
- 95 赤い羽根空の匂いを嗅ぐ教室
- 96 先生の親指憎し林檎かな
- 97 十月の茶碗を持って並びける
- 98 新米を洗い信心ぶかくなる
- 99 大陸にもろとはかなき秋刀魚焼く
- 100 マネキンを足から入れて鶴来たる

- 1 早乙女の 一列ゆきて波の立つ――
- 2 白壁を這う夏服の電気技師――
- 3 蜥蜴の子だるまさんがころんだ――
- 4 夏河の石かるがると子等の越ゆ――
- 5 沈黙の一座見廻す扇風機――
- 6 馬追の眼のやさし硝子窓――
- 7 夕焼の中に小さき生家かな――
- 8 赤蜻蛉空の一角占めにけり――
- 9 爪の端に重み残して赤蜻蛉――
- 10 亀虫の誘い出されし陽の溜まり――
- 11 野地板の穴より覗く秋の空――
- 12 願掛けの長き夫婦や木の実落つ――
- 13 客人(まろうど)の背の照らされて柿紅葉――
- 14 住まい継ぐ夫婦迎えて柿たわわ――
- 15 こほろぎの翅震わせる土の上――
- 16 見返りし鹿の眼の澄みにけり――
- 17 ポケットの指に揉まれし葉屑かな――
- 18 初雪のおとずれを聴く床の中――
- 19 ほっほつと雪化粧して山ほのか――
- 20 長老の注連緇う口の一文字――
- 21 鮫鰯の眼にしゃぶりつく三十路かな――
- 22 新妻や障子張りたる指の先――
- 23 新妻の雨傘閉づる小正月――
- 24 腹這いの山羊立ち上がる四日かな――
- 25 並ぶ背の林のごとし釜始――

- 26 刻を打つ如月の水ひと雫――
- 27 ホースより水ひとすぢに獵名残――
- 28 生まれくる世は選び得ず露の臺――
- 29 春雨をただ受くるなり石蛙――
- 30 若草や大地に分かつ雨の粒――
- 31 春昼の時計職人寡黙なる――
- 32 山茱萸の光こぼるる旧家かな――
- 33 新妻や弥勒の手なる春の暮――
- 34 鳶の来て鋏休めたる夏はじめ――
- 35 貯水池のいつしか満ちて蟬しぐれ――
- 36 傷つけし人想う夜の蛙かな――
- 37 蟪蛄や覚悟のかたき面構え――
- 38 秋祭神主纏う牛の紋――
- 39 輪の中へ袖引き寄せる踊かな――
- 40 満月や米粒白き握り飯――
- 41 山栗の棘やはらかに雨の中――
- 42 ひと村にひと村ぶんの秋の山――
- 43 虫の音の傍らにある暮らしかな――
- 44 二拍手の遠く響きて冬に入る――
- 45 ストーブを背に聞く謂れ古道具――
- 46 白銀の里に身を寄せ実万両――
- 47 口元の角度を保つ雪達磨――
- 48 暁天に雪搔く音の響きけり――
- 49 着ぶくれの幼子の眼の杵を追い――
- 50 ふるさとの小包ひらく冬日向――

- 51 〔ゆく年や形とどめる雲のあり〕
- 52 〔松過ぎの仏前の茶の香りかな〕
- 53 〔先頭のランナー北風をしたがへる〕
- 54 〔徐につかむポストの余寒かな〕
- 55 〔山際に夕日のありて鳥の恋〕
- 56 〔鶯や始祖伝来の節回し〕
- 57 〔電柱の傾きに慣れ春の風邪〕
- 58 〔手をつきてほのかにぬくき我が田かな〕
- 59 〔田植機に王座の如く座りけり〕
- 60 〔人寄りてものを言いたる田植かな〕
- 61 〔山裾の水引き込みて蛙鳴く〕
- 62 〔おどろくも敷居に沿いて百足虫去る〕
- 63 〔父となる友を追いたる緑夜かな〕
- 64 〔秋の風妻帰るらし砂利の音〕
- 65 〔里唄のしゃがれ声なる地藏盆〕
- 66 〔泥みたる落穂を拾う一日かな〕
- 67 〔山の精気配鎮めて秋儼雨〕
- 68 〔穴熊の鼻先光る秋の夜〕
- 69 〔霜踏みて異国の人を想いけり〕
- 70 〔御仏の眉間に翳り河豚を食ふ〕
- 71 〔深々と光纏いて冬の苔〕
- 72 〔神棚の金具清める大晦日〕
- 73 〔ネクタイの結び目正す初仕事〕
- 74 〔酒壺の底の暗さや寒戻る〕
- 75 〔小春日の株（くいぜ）に坐する庭師かな〕

- 76 ささやきのこぼるるほどに梅の花――
- 77 春の野に燃ゆる故人の名刺かな――
- 78 あたたかや今日饒舌の郵便夫――
- 79 人里へ便りをはこぶ春の鳥――
- 80 枝々を移る野鳥や花椿――
- 81 春の日の訛り帯びたる法話かな――
- 82 百の火を焚きて闇夜の桃の花――
- 83 サ―ブ打つ影しなやかに夏に入る――
- 84 干し藁の軒に忙しき初燕――
- 85 羽搏きの数ほど翔べず燕の子――
- 86 遠雷に猫の眼の光りけり――
- 87 即席の椅子並べたる夏野かな――
- 88 花火師の一札残し河を発つ――
- 89 映写機の照らす埃や秋に入る――
- 90 一両の列車駆けるや野分晴――
- 91 海境の道遥かなり天の川――
- 92 嚙りたる齒に色移す甘藷かな――
- 93 陶工の貌ほぐれたる夜半の秋――
- 94 改修の小屋の露に後の月――
- 95 居処を小さく残す冬支度――
- 96 両の手に遊ばせている蜜柑かな――
- 97 沈黙を沈黙のまま冬の星――
- 98 抽斗に残す走書や年惜しむ――
- 99 斎燈の炎の中の若き年――
- 100 巫女の掃く参道長し浦の春――

- 1 読初の文字なき絵本絵解きせり
- 2 夢に色なくて墨絵の宝船
- 3 千本の影を整へ針供養
- 4 たひらかに鉱石図鑑開き春
- 5 浅春の紙一枚で足る手紙
- 6 春霽イエスの若き土不踏
- 7 如月や銀色の傘細く締め
- 8 春は曙不器用なると言ふをどこ
- 9 貝塚の貝は帆船地虫出づ
- 10 スニーカーの砂きらきらと卒園す
- 11 春蘭けてアンリ・ルソーめく植物園
- 12 吊雛めでたきものは土のもの
- 13 納めたる雛ひとつに箱ひとつ
- 14 鋏に雲掠め段段畠打つ
- 15 青き踏む面白きこと面白く
- 16 眼を開けて眠る魚や星朧
- 17 ブラインドかさりと折れて風信子
- 18 種を蒔く祈りにも似し無口にて
- 19 イラストは横顔ばかり四月来る
- 20 西行の色となりゆく花篝
- 21 花冷の壁一面のナイフかな
- 22 朝市の魚に齒のある復活祭
- 23 木苺の花自転車で来る教師
- 24 目借時紙の金魚の金魚鉢
- 25 紙ふうせん花を扱ふこと畳む

- 26 「二個積みめば積木のお家（うち）さへづれり」
- 27 「永き日の逆さに覗く児の奥歯」
- 28 「須磨琴の淡き木目に春惜しむ」
- 29 「炊事場の鹽（たらい）の大小昭和の日」
- 30 「絵暦に農具の並び夏隣」
- 31 「貝殻を箆に載せ売る島薄暑」
- 32 「家青く塗りたる街の聖五月」
- 33 「新樹光オルゴールよりメヌエット」
- 34 「切紙をひろげ一面祭来る」
- 35 「分校の蓋開く机さくらの実」
- 36 「シャンパンの泡星となるみどりの夜」
- 37 「母の日の靴を揃へて脱ぐ漢」
- 38 「土のこと水のこと聞き苗を買ふ」
- 39 「草笛を吹くとき肩のあがりやう」
- 40 「どくだみの花しらじらと島の朝」
- 41 「青青と田に抱かれて草を取る」
- 42 「夏薊頭（ず）よりも高き馬頭琴」
- 43 「夏至の夜や美しき背骨の魚料理」
- 44 「背中より海の音抜け籐寝椅子」
- 45 「レース編む花のかたちの影揺らし」
- 46 「餡蜜や独身である理由など」
- 47 「砂山の仕上げに大暑の手をあてて」
- 48 「カヤックのみどりの櫂さす夏の雲」
- 49 「海見えてまぶしき坂の氷菓売」
- 50 「あかがねの山河額に持つ蘭鐙」

- 51 空蟬の草一本で立つ構へ――
- 52 江戸風鈴どの間口にも植木鉢――
- 53 洗ふ時厚き児の足雲の峰――
- 54 二階より既に水着の児がきたる――
- 55 かき氷祖父への手紙書き終へて――
- 56 箱庭の夕日へすこし吹く砂金――
- 57 大西日飛ぶ鳥長き脚揃へ――
- 58 星涼し碧浮く螺鈿の航海図――
- 59 新涼の手桶を鳴らす牛の乳――
- 60 星迎家族の数の傘を干し――
- 61 学位記も精霊棚のものうち――
- 62 青空をまばらに捌く芒の穂――
- 63 雁渡し金具大きな黒鞆――
- 64 鰯雲糸で仕切れる造成地――
- 65 コスモスは児を抱く腕によき軽さ――
- 66 ねこじやらし駆けだす時は唄ふ時――
- 67 白菊に童子の触れて朱の走り――
- 68 飛鯊の額に余る目玉かな――
- 69 小鳥来る青き薨の神学校――
- 70 秋燕船荷倉庫に灯の入る――
- 71 月祀るうす紅の透く加賀干菓子――
- 72 星月夜牛馬の貌の女神たち――
- 73 長き夜のあちらこちらに紙の束――
- 74 十三夜父の短き子守唄――
- 75 篆刻の鳥走りさう秋灯――

- 76 林檎剥く魔女の仮装の母が剥く――
- 77 サークスの猿酔ふ仕草ましら酒――
- 78 流れ星古代より妻嫉妬する――
- 79 鳥渡る櫓に禱りの飾紐――
- 80 栗紐ひとすぢ青き夜寒かな――
- 81 小雪や虹色ドロップ戸に隠す――
- 82 冬の鋭角黒曜石の古鏟――
- 83 十二月八日ケーキを崩し食ふ――
- 84 梵字ある小石を磨く漱石忌――
- 85 三角がいばつてゐたるおでんかな――
- 86 毛糸編む膝にあふるる大河編む――
- 87 あやとりや万物最後は一つの輪――
- 88 霜降る夜紅き封蝋解くナイフ――
- 89 さざなみの万の尖れり冬の月――
- 90 梟や煎じ薬の火は青く――
- 91 一つづつ児が星を塗り待降節――
- 92 金の玉こぼさず纏ひ大聖樹――
- 93 首にメジャー掛けたる男毛皮店――
- 94 釣銭の笹を提げたる年の市――
- 95 煤逃や日時計の針逃げてをり――
- 96 寒稽古一人三役紙相撲――
- 97 膝を抱く根付の猿や悴みて――
- 98 雪もよひ座繰(ざぐり)の糸の里嘶――
- 99 雪吊の雪が消えずに載るところ――
- 100 麺麴(パン)窯の石あかかと春隣る――

- 1 水の秋旅の序でに橋渡る――
- 2 煌々と詰所にぎはふ里祭――
- 3 賽銭を虫の渦中に投げ込みぬ――
- 4 一方は穴一方は鯨の穴――
- 5 本名で黒子呼ばるる村芝居――
- 6 爽やかや山と我が家と陸つづき――
- 7 留石を固く縛れる秋思かな――
- 8 墓参丁目番地のありにけり――
- 9 ゆるやかに坂のはじまる桔梗かな――
- 10 名月や俤にゆづる二寧坂――
- 11 名月や飲んでから知る清酒の値――
- 12 訪ひて勝手に南瓜叩きけり――
- 13 喰ひながら零余子を人に包みけり――
- 14 犬吼えてさては新入なる案山子――
- 15 大安の紅葉を払ふ記帳かな――
- 16 金貸に菊を返せる菊人形――
- 17 実紫いつしか息の整へり――
- 18 石段のどこかは濡れて紅葉狩――
- 19 松手入問へば素直に答へけり――
- 20 神無月湯呑みに茶葉の流れこみ――
- 21 西口のどこか分からぬ神迎――
- 22 水鳥の寝てゐる鳥についてゆく――
- 23 竹馬を道間違へて降りにけり――
- 24 冬紅葉僧は二列で入山す――
- 25 振つてよささうな万両だけを振る――

- 26 焼諸屋去年のこゑで売りにくる
- 27 味噌汁に海のもの入れ漱石忌
- 28 携帯が顫へまるごと炬燵鳴る
- 29 回転焼詰めたる箱のしつとりと
- 30 着ぶくれてゐて自治会の紛糾す
- 31 終ひ弘法地べたに高き皿並び
- 32 小道具のパンはほんもの聖夜劇
- 33 夜通しの静かな雨や宝船
- 34 同じこと訊きあつてゐる年賀状
- 35 終ひには紐いきいきと猿まはし
- 36 煙ごと串焼を買ふ初戎
- 37 まだ藪のごとき福笹授かれり
- 38 賑はひを抜けて賑はふ残り福
- 39 火おこしは祈りのかたち粥占ひ
- 40 吉報も凶報も食ふ小豆粥
- 41 食ひ終へて椀に湯気立つ小豆粥
- 42 初弘法店主と雨を案じあふ
- 43 懸想文売札束に札仕舞ふ
- 44 柴漬を見まはる嵐山の風
- 45 傘の雪木の葉の雪と払ひあふ
- 46 社長まだ法被着馴れず寒造
- 47 鳥を待つしづけさに似て寒造
- 48 冬の水映れば青の透きとほる
- 49 だんだんと赤の他人へ雪だるま
- 50 神の座の光を纏ひ追儼の矢

- 51 山の形褒めて紙漉師と別る――
- 52 花の兄や我が尻つけて生駒山――
- 53 白梅の影を持たざる軽さかな――
- 54 鶯の飛ぶまへ力抜いて鳴く――
- 55 日記には空のこと書く梅見かな――
- 56 菜の花忌唱へて名前覚えけり――
- 57 海苔船の海苔を払ひて舳ひけり――
- 58 武満忌澱み掬へば澄んでゐる――
- 59 庭園に水湧くところ落椿――
- 60 啓蟄のゲームカセット吹いて挿す――
- 61 苗札のたつぷりと水もらひけり――
- 62 おにぎりにいただき三つ春やすみ――
- 63 駘蕩や他人(ひと)の賽銭にて祈る――
- 64 はんぶんは辛夷のはうへ海の風――
- 65 春の日や吊りて仕舞へる一輪車――
- 66 山道のはじめ踏切蝶の昼――
- 67 雪解や最後の僧は門を閉ぢ――
- 68 古雛笛失くしても笛を吹く――
- 69 後ろよし前よし花菜よし発車――
- 70 花持たぬ草も葺きたる花御堂――
- 71 シャッターは前の店名燕の巣――
- 72 逃げ道を多く拵へ壬生狂言――
- 73 隣家(となり)とは違ふ町名朧の夜――
- 74 真ん中に要らない器械ある飼屋――
- 75 遠足や草で拭きたる靴の裏――

- 76 入口の横に窓描く巢箱かな――
- 77 川よりも広き河原や夏きざす――
- 78 お茶の間のごとく筍直売所――
- 79 扇流し水の機嫌を訊ねつつ――
- 80 ハンカチは頬の固さにして仕舞ふ――
- 81 振花を見つけし列の振れをり――
- 82 草笛のだんだん下手になつてゆく――
- 83 月光にかはかしてゐる羽化の蟬――
- 84 入梅や厩の梁に暦掛け――
- 85 裏表さだまるまへの蠅叩――
- 86 全身を扇で指して確認す――
- 87 月下美人老いたるまへに仕舞ひけり――
- 88 人形が腹話術師の汗厭ふ――
- 89 かき氷親子の匙の入れ替はる――
- 90 臍の緒も浴衣も桐に仕舞ひけり――
- 91 坂に椅子はみだしてゐるビアガーデン――
- 92 舟虫を解散させてから帰る――
- 93 茅の輪にもくぐる人にも拌みけり――
- 94 鉾建や車輪の雨を手で拭ひ――
- 95 暮れやすき路地に鉾町ありにけり――
- 96 祇園祭厨に鉄のものおほし――
- 97 神輿仕舞ふ清めの水を拭きとりて――
- 98 川床のこゑ川のごとくに聞きながす――
- 99 御迎人形海に縁なき武士おほく――
- 100 船渡御や大阪の川皺くちやに――

- 1 ポスターも風責めの砌です――
- 2 ものしずかな冬の櫓の対峙です――
- 3 床の上に服落ちている寒さです――
- 4 セーターから首出すときの真顔です――
- 5 栞してマフラー纏う時刻です――
- 6 忙しげな立川駅に霰です――
- 7 懐手新宿行きの切符です――
- 8 クリスマスケーキのためのリボンです――
- 9 感冒が今日の遅刻の理由です――
- 10 抱擁と革手袋の匂いです――
- 11 珈琲を入れて休まる氷雨です――
- 12 積雪に落ち着くふうの街区です――
- 13 潔い花柵の白さです――
- 14 空港で空席待ちの冬至です――
- 15 弾初めは弟宅のピアノです――
- 16 ラガーらの試合終りの唱歌です――
- 17 路分かれて何れも雪の追儼です――
- 18 医科のみを受験希望の彼らです――
- 19 弟も物理学科を受験です――
- 20 差入れにカツサンドある試験です――
- 21 弟とラジオ修理の二月です――
- 22 三月の汀でポートレートです――
- 23 お祝いに庭のミモザのリースです――
- 24 静々と卒業式の帳です――
- 25 卒業の泪のあとの食事です――

- 26 鳥曇本取るために脚立です――
- 27 アネモネの肥育ノートが端緒です――
- 28 ビル林立橋並列の霞です――
- 29 二人して朝寝している旅行です――
- 30 のどかさが護國寺前の基調です――
- 31 口じゅうがきなこだらけの日永です――
- 32 兄弟に諍いのあるセロリです――
- 33 ランドリー待ちに雑誌の遅日です――
- 34 行人に花降りしきる昨日です――
- 35 就職後の励みにショートケーキです――
- 36 名刺入・定期・合鍵五月です――
- 37 買うものを書き出している五月です――
- 38 降りだして音立ち上がる五月です――
- 39 あめんぼのあとの水輪の一つです――
- 40 あめんぼに光の滓の少しです――
- 41 東京は三十九度の見込です――
- 42 すれちがうとき列車揺れ薄暑です――
- 43 せりせりとサンドイッチの胡瓜です――
- 44 かき氷そして散歩の続きです――
- 45 白雨して物干棹に雫です――
- 46 会うために小諸経由の帰省です――
- 47 立山も登山日和の母校です――
- 48 窯からパン引き出しているヒュッテです――
- 49 匙に取るライスカレーも避暑期です――
- 50 道のべに今も横ある展墓です――

- 51 起き出してよろめいている木槿です――
- 52 調律の白手袋と残暑です――
- 53 鰯雲当直医務に出前です――
- 54 地球儀をもたげて回す九月です――
- 55 浜にうち上がるもの皆さやかです――
- 56 買う本の古い匂いも厄日です――
- 57 水の秋比良山系の翳りです――
- 58 いざよいの情緒が残る城下です――
- 59 呷々と信書仕分けの夜業です――
- 60 物書きのルームメイトの夜なべです――
- 61 吸殻が酸っぱく匂う雨月です――
- 62 木の柿が黄帯びるころの初稿です――
- 63 アトリエのソファで眠る日雀です――
- 64 蔦の這う煉瓦のビルが住所です――
- 65 蟪蛄が顎に取りつくトルソです――
- 66 テーラーは仕事眼鏡の白露です――
- 67 冷ややかな足踏み式のミシンです――
- 68 冷ややかな活版刷りの鉛です――
- 69 冷ややかな天文学の頁です――
- 70 薪割りが十一月の全てです――
- 71 夜明けまであとひとときの櫓です――
- 72 ファクシミリ刷られて落ちる獵期です――
- 73 箱詰めの檸檬五キロが返事です――
- 74 冬隣日向に椅子を出す日です――
- 75 棒立ちに櫟落葉の真下です――

- 76 きょんとんとして頬張る栗鼠の初冬です――
- 77 霜月のオートキャンプのシュラフです――
- 78 枯野で積み込むコントラバスの囊です――
- 79 冬帽がくたびれてある机上です――
- 80 灯が直に目を突いてくる寒さです――
- 81 した音は環状線の師走です――
- 82 晴れていて懐かしくなる冬至です――
- 83 五人中五人マスクのオフィスです――
- 84 暁の仕事帰りのくしゃみです――
- 85 ラーメンが仕事納めの習いです――
- 86 雪を着て佇むだけの櫂です――
- 87 北欧がこのセーターの出自です――
- 88 年越しの雷門の通りです――
- 89 持分は賀状の刷りと掃除です――
- 90 さっぱりと大晦日の框です――
- 91 白々とパン一斤の淑気です――
- 92 肅々と靴下編みの寮母です――
- 93 お座なりの如雨露の内も氷です――
- 94 冬晴れの骨董市の刀です――
- 95 ワープロで小説書きの炬燵です――
- 96 お得意の揚げと小蕪の料理です――
- 97 おでん屋は天神さんの近所です――
- 98 退官の教授を招くおでんです――
- 99 しんとして別れの夜のおじやです――
- 100 弧を引いて離ればなれの燕です――

- 1 溺死たとへば最後に腐る胃の獅子唐――
- 2 花火祭木桶に浮かぶ赤子かな――
- 3 かげろふは蜉蝣王の化身なる――
- 4 海峡の難破に桃のしたたるや――
- 5 眞葛野や歸る時間を卓に置く――
- 6 あきつかぜ僧衣に尼をつつみたる――
- 7 ひとたびは滅びし梨を殖やしけり――
- 8 東方を征せよ梨が下手に剥け――
- 9 割禮や瓶のはじかみとはキリスト――
- 10 また名譽を見たぞ見たぞと茸狩――
- 11 ざりがにのにはふ田となり女官の死後――
- 12 燃えにくきものに木琴志ん生忌――
- 13 黒帶の無言で混じる木賊刈り――
- 14 瓦斯の火が産着に及ぶ月見かな――
- 15 蟪蛄の自決のたびに眼鏡を換へ――
- 16 晝の衣に耳を隠しぬ木賊刈――
- 17 風呂は大いなる白湯生姜掘りごろに――
- 18 死後も讀書するなり花梨がこはれてゐるけど――
- 19 燭魚の干されて青き星のうへ――
- 20 トナカイも獺も麒麟も冬園よ――
- 21 石置けば墓富士置けば神の旅――
- 22 みな葱を手にして立てり葱畑――
- 23 殘蠟をもろ手に量り獅子舞來る――
- 24 寒卵殻の微塵を閨に敷き――
- 25 捨菊をまた別に捨て野を空くる――

- 26 酒粕に鱈は一夜を古びたり――
- 27 天使ら船を沈め出汁沸く湯に滑子――
- 28 着ぶくれて放生の鳩作者の死――
- 29 生も死も選ばず金屏に歸る――
- 30 今年のことみな終へ首に巻ける蛇――
- 31 よく保つや乳は乳房を経て凍る――
- 32 手袋のかたち消えて友らの手――
- 33 鶴の何處を撃ちてもみどりごやはらかし――
- 34 馬はまぼろし雪搔きの女の残り湯飲む――
- 35 月は流刑地粥より蟹の脚突き出――
- 36 全身で海鼠は踊る實朝忌――
- 37 冬帽あまた枝に掛け人體模型に掛け――
- 38 みな善きひと蟹の脚折る業に長け――
- 39 風花や蕉門の戀シヤツを脱ぐ――
- 40 地は嫌と寒鮒死せるまで謂はず――
- 41 花菜雪臨書の逸れて指を嘗む――
- 42 死ぬるまで微熱のつづく梅さがし――
- 43 腹の兒にみずなさらだの水の影――
- 44 書人傳中宦官憤死花李――
- 45 梳かるること菜畑に屈み捻挫見せよ――
- 46 背凭れに齒形の沈む梅見かな――
- 47 ひとり食ふ海苔は紙幣の美味のごとし――
- 48 うしろからそして頭のうへ蝶交る――
- 49 重箱の二段目は砂養花天――
- 50 馬と妊婦青野で撮りし誰に笑ふ――

- 51 全身に臍の散らばる花大樹――
- 52 干鰯の何處にも青のなかりけり――
- 53 パンジー恐怖症明けねば長門の不沈永久――
- 54 生涯分子宮に卵八重櫻――
- 55 鯛の身を尼僧と美僧うりふたつ――
- 56 藤棚に素足は人を離れつつ――
- 57 割れぬ間にその次を吹くしやぼんかな――
- 58 田螺なほ互ひ嘗めたり田螺和――
- 59 生れてより立つも座るもせず墓は――
- 60 蛤や乳房に觸れしまま値切る――
- 61 歸る人に釘煮渡せば微笑みぬ――
- 62 骰子振りて加賀の春夜にこぼれたり――
- 63 卷尺が麻痺の身めぐるチュリツプ――
- 64 金比羅へ蝶は人面なほもちて――
- 65 壺市の壺は覘かれ青鷹――
- 66 スカートに匿ふ雄鶏花菜漬――
- 67 長考に天元取らぬ椿かな――
- 68 此のところ吉良方最眞春の山――
- 69 きるじやぶと爆弾に文字茄子の花――
- 70 大王が結び目を切る夕牡丹――
- 71 曾良忌まで狼魚のはだかな――
- 72 肘まで入る母馬のほと牡丹の斑――
- 73 桑の實を忌まわしと母子らわれを見む――
- 74 星を占め蟲みな奇怪梅雨の婚――
- 75 京都驛高階鰻婚家に幸――

- 76 水羊糞脚のあひだに目があつて――
- 77 汝に鱗がわれに乳房がなき初蚊帳――
- 78 見かけこそ愛じゆんさゐは瓶を出す――
- 79 罐にまだ肉を餘して瀧見かな――
- 80 男身も女身も蛸の入りどころ――
- 81 虚子以來保夜の吐く水鹽し――
- 82 唐橋のつづくかぎりに裸かな――
- 83 繪日記を搾れば金に銀に灼け――
- 84 停まるとき宙に早の一輪車――
- 85 ふと太古男の汗が薙ぐ杉菜かな――
- 86 銀河系乳房ふたつと謂はず多々――
- 87 向日葵やとりまく吾のひとりづつ――
- 88 鯖壽司は死後にも求め易きかな――
- 89 茄子を煮るなかばより兒を煮てゐたり――
- 90 遠雷やからだ嗅ぎあふ石切り場――
- 91 むらさきのほともあり乞われ毛蟲打つ――
- 92 向日葵は乳房のはざまにも重たし――
- 93 閻魔その舌馴れ鮎にして吾に呉れよ――
- 94 苦瓜の下半黄熟新幹線――
- 95 柿の葉鮎開けば平家滅びてゐし――
- 96 背丈あらばユツカの花を天より摘む――
- 97 凌霄花臍の緒残る身投げかな――
- 98 瀧有りやと百日紅その百日目に――
- 99 鮎足らぬも餘るも青き蚊帳のそと――
- 100 茄子の紺握るや現實以外闇――

- 1 「エヂソンの天才の夏来りけり」
- 2 「鮎季の峠に雲の浮き古りぬ」
- 3 「肉声の日々なり麦が笛になる」
- 4 「柿の花石白く水湧きにけり」
- 5 「汀洲の廓寥とある胡瓜かな」
- 6 「うちひろげ干すや卯月の帯一本」
- 7 「流さるゝ牡丹を音と聞きしのみ」
- 8 「冷えながら届く日差やあやめぐさ」
- 9 「仏体に織月黄なるあやめかな」
- 10 「林が疎まつすぐ行けば水芭蕉」
- 11 「涼しさや持てばしをれて仮名手本」
- 12 「芍薬を入れし棺は小雨かな」
- 13 「昼寢覚いくつもたより来てゐたる」
- 14 「ぶつかる魚夏はこほらぬみづの中」
- 15 「赤塚不二夫忌おほぜいのある木のむかう」
- 16 「のうぜんの花のかなたに浦なづむ」
- 17 「田一枚夏といふ夏過ぎにけり」
- 18 「水を汲むブリキの夏を痩せにけり」
- 19 「手拭ひに虫くるしめり鯖の旬」
- 20 「斧嚙ませあり南風の櫓一樹」
- 21 「鷺草や卒塔婆に箒当りをり」
- 22 「ぎぼうしや氷を入れて桶くらき」
- 23 「夏の鴨はちすの如く水ひろぐ」
- 24 「蒲の穂のあかあかとして雉馳せぬ」
- 25 「今し方瓜呉れし子の寝てゐたる」

- 26 水ぶちまけし桶の中蟻残る――
- 27 顔痩せて次なる菊を持てりけり――
- 28 さはやかやほとけ見ることいくたびも――
- 29 秋草のまはり明るくなりゐたり――
- 30 萎え閉ぢし花に藥浮く芙蓉かな――
- 31 人みちに萩刈られある洲なりけり――
- 32 水甕に喉元うつる榎櫃の実――
- 33 鬼灯の中ひんやりと赫きもの――
- 34 秋の蟬ちつとも死なぬ深空かな――
- 35 洲歩けば梔子の実の流れ来る――
- 36 日晒しにほとけを運ぶ通草かな――
- 37 水くらくあをぞらうつす松ぼくり――
- 38 湧き湧きて秋の螢に微塵かな――
- 39 夕照を川は流さず実むらさき――
- 40 人の来ていくつも喋るくわりんの実――
- 41 りんご採る手に雨粒のなだれ込む――
- 42 知つてゐる言葉で書けばすゝきかな――
- 43 秋草にたふれし花の茎見ゆる――
- 44 たよりして吉備のしたしさ秋の暮――
- 45 口吻に父髻髯や榆もみぢ――
- 46 つとめての野のひろがりに梨榧する――
- 47 冷えし菊袖口に腕さはりけり――
- 48 何回もすゝきの前で写真撮る――
- 49 家ふかく吟声あそぶ蓼の花――
- 50 うつゝにも萩刈らずゐる真鯉かな――

- 51 洲にありて草のしたしき紅葉かな
- 52 目逸らさずあるときの空高きこと
- 53 木仏のつかのま青き雁の頃
- 54 刈り捨てしつまくれなゐのほとびをり
- 55 文殻を焚くに掠鳥親しくて
- 56 村雨の砌ありける冬田かな
- 57 加賀近く翌なき秋となりにけり
- 58 傘提げて鯨とぶ秋を寒がりぬ
- 59 土くれに飴のにほひのしぐれあり
- 60 ひとむらの山藤の葉の氷りゐぬ
- 61 あかるみに浦のさめゆく龍の玉
- 62 木瓜の寒さやそのちの湾の夢
- 63 茶の花へまなざし遠くしてをらる
- 64 大仏の胸のうすさや冬の川
- 65 どの木々も林の中や冬帽子
- 66 見えてゐるものゝ暗みに実千両
- 67 云ふまでのその降りやうや明の雪
- 68 手にしたる笹より雪の落ちにけり
- 69 来る舟に夜の先んずる霰かな
- 70 冬の水日向へ光ゆるみつゝ
- 71 としどしに雪野となりぬ化野は
- 72 先の人いちにん耽る雪野かな
- 73 仏壇に障子明りのうち烟る
- 74 寒鯉の頭真竹の如く浮く
- 75 くらがりを映す水なし龍の玉

- 76 割つたれば白あざやかに氷かな――
- 77 大根や墓の中まで水流れ――
- 78 ゆふしぐれしたゝかなすや近江べり――
- 79 ときじくの躑躅の花の氷りもす――
- 80 雑魚居るや吹かるゝ如く春水に――
- 81 春の雲花入れし炉のつめたさに――
- 82 吹きかへすうたゝの東風も浜の寺――
- 83 玄関に電話老いたり紫木蓮――
- 84 宿出でて春の入江の横しぐれ――
- 85 大きな花涅槃の海へ流れけり――
- 86 詩を書いてゐた三月の詩が残る――
- 87 地図は木をすみずみに書き木は桜――
- 88 熊ん蜂二匹や花を同じうす――
- 89 くらがりにはしごをしまふ躑躅かな――
- 90 パンジーの黄やうらがはにその黄透く――
- 91 留守がちに僧老いそめし柳かな――
- 92 鯉食うて竹の秋とは川つめた――
- 93 かほ暗く桜木に藤のぼりゐつ――
- 94 火を焚けば煙の中に藤の花――
- 95 窯冷えて熊ん蜂ゆきかよふなる――
- 96 木蓮の鋭き蕾芽が噛める――
- 97 葉まじりの桜へ波の飛びにけり――
- 98 燻べ足せる大蛤が花の中――
- 99 浜へ出て春の墓参の暑さかな――
- 100 はゝがりに深まる春をわらぢむし――

- 1 〔つ・ば・さと動くくちびる夏はじめ〕
- 2 〔夕虹を指すに遅れて嗚呼と云ふ〕
- 3 〔ふかぶかと白靴を晴野が匂ふ〕
- 4 〔水かげろふ日傘のうちを照らしけり〕
- 5 〔涼しさや龍をふちどる金ひとすぢ〕
- 6 〔林開けて向かひあはずに椅子がある〕
- 7 〔ナトリウムランプ抜け五月のばか太い樹〕
- 8 〔量子力学袋の中に玉虫ゐ〕
- 9 〔昼顔に白犀ほどの雲ありぬ〕
- 10 〔少年の眼濁流めく午睡〕
- 11 〔水無月晴れて花の名前の若くあり〕
- 12 〔金魚弱りてはればれと鳴る時計かな〕
- 13 〔煙草の箱夏瘦の手をはみ出せる〕
- 14 〔眼のよどむ帰路ごきぶりがよぎりゆく〕
- 15 〔白鳥を離れみどりの藻の夜涼〕
- 16 〔うすい皿かさなる虫の闇のなか〕
- 17 〔画家がゐて屋根裏にひとつのランプ〕
- 18 〔木曜の山羊よこたはる昏さかな〕
- 19 〔蛸やわづかに花を降らせる樹〕
- 20 〔ゑのこ草川の疲れの絶え間なく〕
- 21 〔絵本閉づれば真葛原まで続く道〕
- 22 〔をなもみよ野原の磯に似るところ〕
- 23 〔曼珠沙華鳴くとき尖る鳥の舌〕
- 24 〔どろどろと空耳そだつ野菊かな〕
- 25 〔檸檬まで来たりて白き川の音〕

- 26 抽斗が荻のどしやぶりへとつづく――
- 27 黄落を二手にわかれ鳩が来る――
- 28 逝く秋がまぶしい海としてわかる――
- 29 貝食うて枯木のうへに雲来たり――
- 30 火事場帰りの胸元にペン差しなほす――
- 31 造花ひまわり北風に晒してパチンコ屋――
- 32 セーターのひと縦の木を囲みけり――
- 33 山系明ける部屋に暖炉の余熱かな――
- 34 毛糸玉とはもう言へぬ平たさよ――
- 35 三月のひかりに壇の傷あらは――
- 36 菜の花の中の蛇口の涸れてをり――
- 37 風車西の市場の違ふ匂ひ――
- 38 蛭烏賊青菜に目玉こぼしをり――
- 39 とどまれば髪ぬるくなる虻の岸――
- 40 青銅匂ふ花屑の色抜く水に――
- 41 蛇の頭のしなびて流れよりあがる――
- 42 沼はおほきな樟脳の昼寢覚――
- 43 まどろみを歩くどこにも草いきれ――
- 44 足の重さは如雨露ほど虹を見にゆく――
- 45 滝壺にあるなまぐさい手足かな――
- 46 ほたるぶくろ手をひきながら呼びに来る――
- 47 灼けながらばらばらに来る犬の脚――
- 48 青鷺はビル光のなか展けてゐる――
- 49 ががんぼの脚途中なるその感じ――
- 50 金網を蝙蝠しろい裏がゆく――

- 51 あたたかくくづれてゐたる螢かな――
- 52 いつまでもくらはみづにつきあたる――
- 53 はつ秋の齒車の組む山羊のかほ――
- 54 吹かれつつ茸となつて痩せほそる――
- 55 まづしい肩いくらでも朝顔が咲く――
- 56 棕鳥がゆめのつづきに渦巻くよ――
- 57 縫針に喉うづく秋晴の蔵――
- 58 芋虫がゐて空腹の廊下かな――
- 59 睡りぐすりが喉とどこほる鳶の部屋――
- 60 背高泡立草こけた頬ときにまぶしい――
- 61 菊までのなかばを座礁するひかり――
- 62 こほろぎにとりどりの靴ゆき過ぎる――
- 63 空をふと忘れて秋の蛇のこと――
- 64 小鳥来るくちびるの皮食べてゐて――
- 65 ぼうつとゑむひとびとを去る鵜――
- 66 鶏頭はなつかしいどしやぶりを吸ふ――
- 67 傘閉ちて冷ややかに背景となる――
- 68 秋冷えはみごとな鳥にない乳房――
- 69 霧にこゑ肉のからだをさしおいて――
- 70 夜霧よりくぐもる鳩を取り出しぬ――
- 71 鶴来るに工場回るふるい熱――
- 72 つめたい山札夜通してのひらがめくる――
- 73 木の葉ねむたさ糸を引く口のなか――
- 74 風花よ肉いちまいを口にいれ――
- 75 そふらので来るむささびの気圧かな――

- 76 布巾煮る鯨が覆ふたそがれで――
- 77 犀がゐてはじめを曇りがちの春――
- 78 朧夜のまばたきをみづ這ひのぼる――
- 79 藁が幽霊よりもどつとある――
- 80 野遊びのきれいな耳についてゆく――
- 81 みづかきの昏さにたんぽぽの綿毛――
- 82 首すぢの熱さへずりに曝しをり――
- 83 永き日を部屋まで海が照つてゐる――
- 84 走ると見えないさくらはなびらそのひかり――
- 85 うすびかりして花過の四肢の端――
- 86 はつなつの陰を排せる琴の部屋――
- 87 痣がちの四肢を余せり夏館――
- 88 わたくしが丸太のやうな黴の館――
- 89 夏は夜明日ゆく川のやうに伏す――
- 90 夏風邪の厨にたくさんの水面――
- 91 眼ねばつく何もない冷蔵庫――
- 92 おほみづあを睡りのなかに透けてゐる――
- 93 夢にまでニュートン算の牛が来る――
- 94 もうろうと昼顔だけがある景色――
- 95 灼けた窓からすこし見えるくさい港――
- 96 くちなはのかぼそい赤につづく舌――
- 97 凌霄よ眼鏡にほそい雨がふる――
- 98 虹見せてくる眼球はすこし丘――
- 99 髪洗ふそのつどにはとりに似るよ――
- 100 こゑは鋭利にくちびるを濡れ夏終はる――

- 1 「あをによし奈良の夏空かくも青き」
- 2 「なみおとになみたはぶれてなつのくれ」
- 3 「蠅の足蠅の躰を欠きてあり」
- 4 「さはれずの墓たちのぼる紫雲英田は」
- 5 「柚子の花骨壺に骨ひとりぶん」
- 6 「蜘蛛おのが虚空を抱きて果てありぬ」
- 7 「アイスクリーム古着屋の裏が海」
- 8 「木苺の花の苺になるところ」
- 9 「われの影われよりも美し土佐夕焼」
- 10 「バベル以後塔のかなしさつばくらめ」
- 11 「どの紙も紙飛行機を秘め夏は」
- 12 「百日紅佳き平仮名にぐりとぐら」
- 13 「まどろみが夏風邪の子をふうと容れ」
- 14 「ひとやすみすれば日暮の夏の海」
- 15 「けふよりの旅靴に竹落葉かな」
- 16 「日本に歳時記のありバナナむく」
- 17 「哲学者その妻の名の涼しかり」
- 18 「翻訳を経て名文やおじぎ草」
- 19 「舐めて酸き己がくちびる炎天下」
- 20 「ぬばたまといふ言葉あり遠花火」
- 21 「なにようもなき梅雨の夜の長電話」
- 22 「六月出土梅雨晴竜とこそ云はめ」
- 23 「ひるがほにからりと晴れて誕生日」
- 24 「枯れ薔薇の掠れ鳴りたり薔薇の中」
- 25 「祭の灯わたあめを透けをりにけり」

- 26 〔みづうみの夜の濃かりけり茄子の花  
- 〕
- 27 〔午睡僧おのが僧衣のほつれ吹き  
- 〕
- 28 〔ぼうたんの揺るる読経でありにけり  
- 〕
- 29 〔秋雲や千切れて飛べる雲の中  
- 〕
- 30 〔しばらくは役場も早稲のあかるさに  
- 〕
- 31 〔蓑虫や北京の月は詩を為さしめ  
- 〕
- 32 〔ななかまど見飽きし手品なれど愛す  
- 〕
- 33 〔小鳥来るなんかい寝ても同じかほ  
- 〕
- 34 〔さはやかに子りす前足より落ちぬ  
- 〕
- 35 〔人形にまなうらのなし秋の空  
- 〕
- 36 〔秋風や振れば音して万華鏡  
- 〕
- 37 〔ポケットに牛舎の鍵や草の露  
- 〕
- 38 〔早退や昼の月とはあな白き  
- 〕
- 39 〔徒然にして秋草の旅疲れ  
- 〕
- 40 〔こほろぎの草喰ふかほが目の前に  
- 〕
- 41 〔霧に御手ひとびと目覚めさせむとす  
- 〕
- 42 〔ぎんやんま薬をつかみて花揺れず  
- 〕
- 43 〔銀漢や眠りつつ聴くおのが息  
- 〕
- 44 〔きつつきの木つつく音のつとに尽き  
- 〕
- 45 〔雲上は恒のあをぞら朴落葉  
- 〕
- 46 〔赤とんぼ荷造りはゆつくりがよし  
- 〕
- 47 〔首都おのが光に照りぬ秋の雨  
- 〕
- 48 〔晩秋や大きな木に抱きつけば  
- 〕
- 49 〔ねむりびとまた一人増え星流れ  
- 〕
- 50 〔白菜の張り付いてゐるお玉かな  
- 〕

- 51 寒林のその一本や倒れたる――
- 52 おもへらく木枯は木を愛してゐる――
- 53 葉の落ちて落葉のなかへまじりけり――
- 54 望遠鏡たたむ凍星容れたまま――
- 55 教科書のをはりの雪の詩なりけり――
- 56 冬虹の現れはじめを誰も知らず――
- 57 見えながら冬虹消えてゆきにけり――
- 58 冬蜂死す仰臥の胸に脚集め――
- 59 うつし世に照らぬ岸なし竜の玉――
- 60 これよりは旅あかるさの雪の岸――
- 61 中心へ火が燃えすぎる火のなかで――
- 62 火や己がかたちに光満ち尽くし――
- 63 終に火の崩すは焚火自身かな――
- 64 せせらぎをやや凍りつつうごく水――
- 65 冬青空カンフーの息永く疾く――
- 66 凍星なつかし利器灯し確かめよ時刻――
- 67 湯冷めせむ詩人を悼む詩のあれば――
- 68 寒き夜の挿絵をつぎつぎとカリブー――
- 69 ストオブに火の神ゐむか鳴り爆ぜぬ――
- 70 折るべうもなや奥蝦夷は大氷柱――
- 71 冬の夜の小指の纏ふうすあかり――
- 72 詩がよく出来るふるさとの氷る頃――
- 73 ジャケットや華族末裔借家暮らし――
- 74 理論上は吹ける口笛冬のくれ――
- 75 行く雲に卒業証書とはつめた――

- 76 函館に花前線がぶつかりぬ――
- 77 黒板に桜描かれて散ることなし――
- 78 薄氷の上うつすらと水ながれ――
- 79 浅草は花散る猫の身づくろひ――
- 80 猫の子が猫の子を見てゐたるなり――
- 81 ものの芽につよきみどりの極まりぬ――
- 82 春風や淋しきものに腹話術――
- 83 それよりは恒に葬後のかざぐるま――
- 84 川すじを離れて濡るるすみれかな――
- 85 春のソプラノリコーダー目を閉ぢて――
- 86 春の夜やピアノにあれば指は疾風――
- 87 やどかりに宿貸す貝のあはれかな――
- 88 キヤパの忌の雲大いなる夕べあり――
- 89 教科書のおもての照りや春疾風――
- 90 夜明け未だ夜のごとくあり柿青く――
- 91 しあはせの亀に貧しき日永あり――
- 92 おりいぶの珈琲の春惜しむべし――
- 93 乾びゐて寓意となれる蜂なりけり――
- 94 ひなまつり母早逝の家系あり――
- 95 酔うて言葉は薩摩のそれや花の雨――
- 96 春の夜の字幕の愛のつたなけれ――
- 97 みたらし引くみたらし団子春のくれ――
- 98 わするな草ねむりは橋をゆくやうに――
- 99 ふらここをうつすおほきなにはたづみ――
- 100 葉一片風の柳を離れけり――

- 1 「まず家をたずねて小春日和知る」
- 2 「くちびるが先にまぶしくなる冬日」
- 3 「鯛焼をならべて君は肺呼吸」
- 4 「はなとはなとはなとちるものふゆうらら」
- 5 「なにもかも書けない手紙ならい吹く」
- 6 「再会けれど冬の話をする」
- 7 「ざっくりときみしい着ぶくれて新宿」
- 8 「何万回目の初雪いもうとの庭に」
- 9 「氷海の映画のように夜はじまる」
- 10 「ふりかえるときの顔から波の花」
- 11 「年守り針屋は針屋らしく座す」
- 12 「初風はくるしまぎれに目を覆う」
- 13 「彼らまた手だけにふれて雪のひま」
- 14 「果てになる感覚として春きざす」
- 15 「水温むなんかの花が咲いて壊れる」
- 16 「逡巡しはるの渚に同化しそう」
- 17 「白蓮ばかり受胎告知の声を聞く」
- 18 「◆◆◆◆◆（ほうせきのつらなり）春の雨ぼかす」
- 19 「周遊のまた春光を手放して」
- 20 「あたらしいフォントの茶摘唄つたない」
- 21 「花散らす距離にもたれて告白す」
- 22 「人魚姫そだててぐふふ甲府の駅」
- 23 「わたしもう猫をおもいだせない」
- 24 「欠陥した僕がかかれた本がある」
- 25 「うつくしいひとだったし名古屋城はでかった」

- 26 下町のミサを見過ごし夏に入る――
- 27 雑踏のなかで夏蝶雑踏のなかで――
- 28 余花暮れるせかいにまたとないつづき――
- 29 ぼんやりと薄暑を過ごすあそびかな――
- 30 王国にくる短夜のことが嫌い――
- 31 かきはじめうすみどりなる本の夏――
- 32 うすく咲くばらいつまでもしらない風――
- 33 夏の日や子供はちゃんと老いてゆく――
- 34 てまりばな祈るそうかもしれないと祈る――
- 35 西日ぐらついて星がでる準備――
- 36 はこばれてうなずく君が夏の鳥――
- 37 おーぷんかーはしらせまなつがうるさいなあ――
- 38 先生は恋多きひと夕端居――
- 39 前髪をかきわけすべて真珠にする――
- 40 身寄りまたなくした君を巣鴨で待つ――
- 41 ふちどりの鳥を愛せる秋のはじめ――
- 42 やさしくて秋蒔の影呼び起こす――
- 43 みんないないあとであふれ出す銀河――
- 44 人はまばらに秋をうむ井の頭――
- 45 すこしじぶん透かしてみせるとき鏡花忌――
- 46 ラフランス沁みゆくまひるまの座敷――
- 47 知ることになるしらつゆのいのちがけ――
- 48 母恋（ははこい）の少年かぼすから放つ――
- 49 黄落のなか手をふりかえしてゆめ――
- 50 秋の夜うまく散つてくらがりのひとびと――

- 51 「わたし血を巨峰食べつくしてわかる」
- 52 「母うつくし夜はしだれて秋の列車」
- 53 「柚子について いちばんせつない眠りかた」
- 54 「カフェは混雑秋の空うれしい」
- 55 「すじこのおむすびむすびあいたる夜寒かな」
- 56 「つじつまが合わない夜の須磨にきて」
- 57 「子供だろうか そのくちぶえのあとの水」
- 58 「やはり路地裏だろう十八を終えるには」
- 59 「どうにもせつないサブナードの逃げ口」
- 60 「靴ひもを結べぬきみというて枯野」
- 61 「こはるこはるるひとびとすわらせてとじて」
- 62 「どうぶつと呼ばれて冬がすみまぶしい」
- 63 「ふがない手をつかまれて日短」
- 64 「雪の夜の湯ぶねをしんとなぜている」
- 65 「冬ずっとなみだのあとをたどるよう」
- 66 「目をふさぐ花と呼ばれて冬の薔薇」
- 67 「おおゆきふる波はなこうどのしらほね」
- 68 「ポインセチア落ちてともだちの結婚」
- 69 「こわされたものとして会う 湖に冬」
- 70 「嘘がばれて正月までが長いよう」
- 71 「歴史すべてたなびいてくるはつがらす」
- 72 「ともだちの横顔を泣く氷湖の奥」
- 73 「大雪に生きてるひふをぶち破るピアス」
- 74 「呼吸 森はすべてあなたのものになれ」
- 75 「雪のひま花びらていねいにふせる」

- 76 分院がこの世の果ての春の夜の――
- 77 はぐれたくなって桜を踏んでいる――
- 78 尾びれのない国ははじめて花衣――
- 79 子猫うまく書棚にかくれているか――
- 80 鮮明な春風くちびるにあそぶ――
- 81 つつじ咲くらんりつしてた僕たち――
- 82 特攻はすこし死なずに春の水――
- 83 つらぬけないはなばなたちを置いて帰る――
- 84 少し手を戸惑うちゃんと土用灸――
- 85 さらわれるときまみどりの初夏が来る――
- 86 かんむりふらせ夏蝶がうまれる――
- 87 つかまってねいまはつなつの狩猟劇――
- 88 ゆびでつくる星から夏がやってくる――
- 89 夏シャツにまかせて睡る部屋が違う――
- 90 それなりにいびつな空の明急ぐ――
- 91 つめられてポストンバッグ誰かの夏――
- 92 だいとうあていこくを捨て海でキス――
- 93 かざかみのわたしとむらう海辺の暮（はか）――
- 94 路地裏のみずをあやして海月かな――
- 95 帰省した兄をみあげる きれいだなあ――
- 96 めがねの跡おもいだすとき柚子の花――
- 97 百合いつかひとをわすれる街にきて――
- 98 歯科医いつも狙う星があるだろう――
- 99 波いつも失うもののそばにゆく――
- 100 影を愛すようにうなばら秋を待つ――





